

第4章 自然科学分析

第1節 分析の概要

本節では、次節に記載する自然科学分析を実施した経緯と、結果の概要及び考察を述べる。

ST 1～ST 3 は、旧谷地形の底にあたる BQ 5 グリッドから BP 4 グリッドの接続した場所で検出した。検出面及び埋土中から焼土・骨片・炭化物がまとまって出土し、ST 2 からは被熱した天目茶碗 1 点が、ST 3 からは鉄釘が出土したことから中世の火葬施設と考えたが、天目茶碗以外に時期を判別できる遺物が出土しなかった。また、ST 4 は 6 号古墳南の AS15 グリッドで検出した。ST 1～ST 3 と同様に、埋土から焼土・骨片・炭化物・鉄釘が出土し、壁面及び底面に被熱痕跡がみられた。また棺台と考えられる人頭大の礫も 7 個確認したため火葬施設と判断したが、時期を判別できる遺物が出土しなかった。2・3 号古墳東側の DC13 グリッドで検出した SL 1 は、埋土中に焼土と少量の炭化物を含み、壁面や底面に被熱痕跡がみられ、火葬施設の可能性が考えられた。この周辺にも類似遺構 (SL 2・SL 3) が確認できたが、いずれからも時期を判別できる遺物が出土しなかった。以上のように、遺構が機能した時期を推定する遺物が限られるため、放射性炭素年代測定を実施した。

分析の結果、ST 1・ST 4 出土の人骨は 15 世紀前半、ST 2 出土の人骨は 15 世紀前半～後半の時期を示した。ST 2 出土の天目茶碗は 15 世紀中頃のものと考えられ、測定された年代とほぼ一致した。また、ST 3 出土の炭化材は 13 世紀後半の時期を示したが、古木効果の影響によって古い年代が得られている可能性がある。一方、SL 1 出土の炭化材は縄文時代早期中葉頃の時期を示した。

第2節 ST 1・ST 2・ST 4 出土骨片及び ST 3・SL1 出土炭化物の放射性炭素年代測定

1 はじめに

岐阜市洞に位置する洞第 2 古墳群では古墳周辺から火葬施設と考えられる遺構が検出された。遺構から出土した人骨（焼骨）及び炭化材を試料として、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。分析は、伊藤茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze・竹原弘展・中村賢太郎（株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ）が担当した。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 29 のとおりである。試料は、火葬施設と考えられる遺構から採取された人骨（焼骨）3 点と炭化材 2 点の計 5 点である。

ST 1・ST 2・ST 4 では、人骨（焼骨）を試料とした。3 点の人骨（焼骨）は、白色になるまで良く焼けており、コラーゲンの抽出が望めなかったため、骨を構成する無機質に含まれる炭酸塩を測定の対象とした。焼骨を、Lanting ほか (2001) の方法に従って、1.5% の次亜塩素酸ナトリウム溶液と 1M の酢酸で洗浄した後、リン酸との反応で CO_2 ガス化した。

SL 1 と ST 3 では、炭化材を試料とした。2 点の炭化材は最終形成年輪が残っておらず部位不明である。炭化材は、酸・アルカリ・酸洗浄後、燃焼により CO_2 ガス化した。

CO_2 ガスを精製後、水素還元によりグラファイト化した。試料は調製後、加速器質量分析計（バレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表 29 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-30591	試料No. 1 遺構: ST 4 層位: 4 遺物No. 393	種類: 人骨 (焼骨) 状態: dry	超音波洗浄 サルフィックス処理 次亜塩素酸ナトリウム溶液洗浄 (1.5%) 酢酸洗浄 (1M)
PLD-30592	試料No. 2 遺構: ST 2 層位: 1 遺物No. 593	種類: 人骨 (焼骨) 状態: dry	超音波洗浄 サルフィックス処理 次亜塩素酸ナトリウム溶液洗浄 (1.5%) 酢酸洗浄 (1M)
PLD-30593	試料No. 3 遺構: ST 1 層位: 1 遺物No. 538	種類: 人骨 (焼骨) 状態: dry	超音波洗浄 サルフィックス処理 次亜塩素酸ナトリウム溶液洗浄 (1.5%) 酢酸洗浄 (1M)
PLD-30594	試料No. 4 遺構: SL 1 層位: 5 遺物No. 594	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.2N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30595	試料No. 5 遺構: ST 3 層位: 1 遺物No. 620	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.2N, 塩酸: 1.2N)

3 結果

表 30 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第 169 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 衍を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には 0xCal14.2 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、0xCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表30 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-30591 試料No. 1	-21.67 \pm 0.18	506 \pm 19	505 \pm 20	1415-1432 cal AD (68.2%)	1407-1440 cal AD (95.4%)
PLD-30592 試料No. 2	-27.52 \pm 0.16	428 \pm 19	430 \pm 20	1440-1458 cal AD (68.2%)	1432-1477 cal AD (95.4%)
PLD-30593 試料No. 3	-24.51 \pm 0.17	490 \pm 18	490 \pm 20	1421-1437 cal AD (68.2%)	1414-1443 cal AD (95.4%)
PLD-30594 試料No. 4	-26.60 \pm 0.21	8095 \pm 28	8095 \pm 30	7122-7118 cal BC (3.0%) 7083-7048 cal BC (65.2%)	7166-7155 cal BC (1.5%) 7144-7041 cal BC (93.9%)
PLD-30595 試料No. 5	-24.59 \pm 0.18	707 \pm 19	705 \pm 20	1274-1289 cal AD (68.2%)	1265-1299 cal AD (95.4%)

4 考察

以下、2 σ 暦年代範囲（確率95.4%）に着目して、結果を整理する。

ST4の人骨（焼骨：PLD-30591）は、2 σ 暦年代範囲が1407-1440 cal AD (95.4%)で、15世紀前半であった。

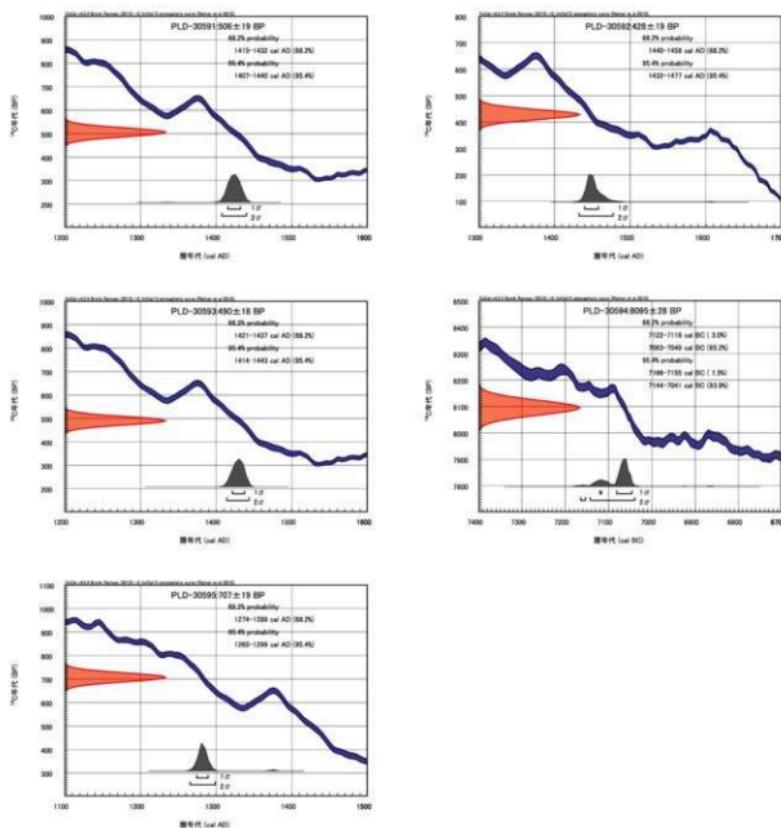
ST2の人骨（焼骨：PLD-30592）は、2 σ 暦年代範囲が1432-1477 cal AD (95.4%)で、15世紀前半～後半であった。

ST1の人骨（焼骨：PLD-30593）は、2 σ 暦年代範囲が1414-1443 cal AD (95.4%)で、15世紀前半であった。

人骨（焼骨）は3点とも15世紀で、室町時代に相当する暦年代範囲を示した。なお、骨の炭酸塩は生前にゆっくりではあるが一定の速度で置換する。そのため、骨の炭酸塩は10～20年程度の期間に体内に取り込まれた炭素を含む。したがって、焼骨の ^{14}C 年代は死亡する10～20年程度前から死亡時までの期間の平均と考えられる。また、骨の炭酸塩は、主に食物中の炭水化物と脂肪、あるいは過剰な蛋白質由来する。したがって、海産の食物に由来する脂肪やタンパク質が主食でない限り、炭酸塩の ^{14}C 年代はリザーバー効果の影響を大きく受けない（Lanting, 2001）。

SL1の炭化材（PLD-30594）は、 ^{14}C 年代が8095 \pm 30 yrBP、2 σ 暦年代範囲が7166-7155 cal BC (1.5%)及び7144-7041 cal BC (93.9%)であった。この年代は、小林（2008）、小林編（2008）、工藤（2012）を参照すると、縄文時代早期中葉頃に相当する。SL1は、火葬施設と推定されていたが、土器の出土がなく、時期を中世とする確実な考古学的根拠は無い。SL1は、炭化材が示した暦年代範囲を根拠として、縄文時代早期中葉の焼土遺構と理解するのが妥当であろう。

ST3の炭化材（PLD-30595）は、2 σ 暦年代範囲が1265-1299 cal AD (95.4%)で、13世紀後半であった。これは鎌倉時代に相当する。なお、木材は測る年輪によって異なる ^{14}C 年代が得られる。すなわち、樹皮直下の最終形成年輪を測れば、木材の伐採年（枯死年）が得られる。一方、内側の年輪を測れば、どの程度内側かに応じて、伐採年（枯死年）よりも古い年代が得られる。これは古木効果と呼ばれる。今回測定した炭化材（PLD-30595）は最終形成年輪が確認できていないため、古木効果の影響により古い年代が得られている可能性がある。



第169図 历年較正結果

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 「Bayesian Analysis of Radiocarbon dates」 『Radiocarbon』, 51(1), 337–360頁
- 小林謙一 2008 「縄文時代の暦年代」 『歴史のものさし』 (縄文時代の考古学2)、株式会社同成社、257–269頁
- 小林達雄編 2008 『総覧縄文土器』、アム・プロモーション、1332頁
- 工藤雄一郎 2012 『旧石器・縄文時代の環境文化史』、新泉社、376頁

- Lanting, J. N., Aerts-Bijima, A. T. and van der Plicht2001 「Dating of Cremated Bones」
『Radiocarbon, 43(2A)』、249–254 頁
- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」 『日本先史時代の ^{14}C 年代』 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編：日本第四紀学会、3–20 頁
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Haflidason, H., Hajdas, I., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J. 2013 「IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP」 『Radiocarbon, 55(4)』、1869–1887 頁

第5章 総括

今回の発掘調査によって、新たに古墳時代中期から後期の古墳9基を検出したほか、縄文時代から中世以前の土地利用の状況が明らかとなった。ここでは、県内や近隣の調査事例と比較・検証を行い、当該地の土地利用の変遷について概観するとともに、当古墳群の変遷の特徴や、当古墳群の初現とみられる5号古墳の被葬者像について検討する。

第1節 土地利用の変遷について

1 縄文時代

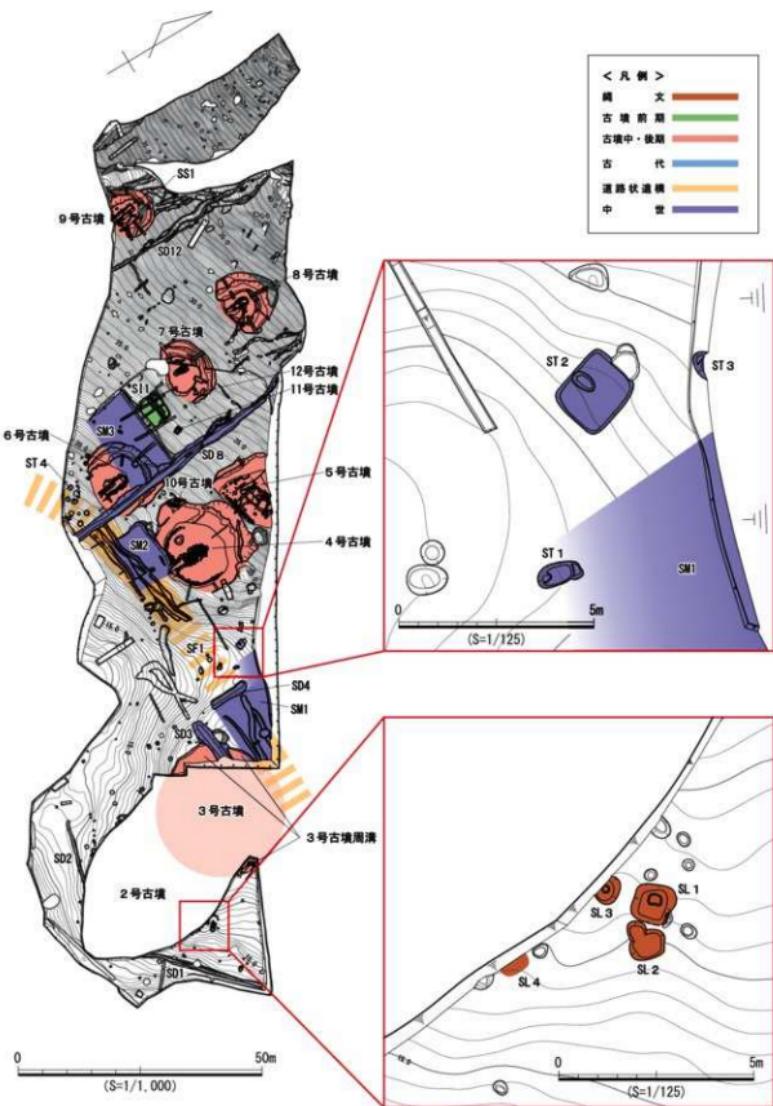
当該期の遺構には、焼穢集積土坑3基・炉跡1基がある。発掘区東側の2・3号古墳が所在する舌状尾根東側の緩やかな斜面に分布する。SL1の時期は、出土した炭化物の放射性炭素年代測定結果から縄文時代早期中葉と考えられる。また、その他の遺構についても、形態や規模の類似性、狭い範囲にまとまって分布する状況から同時期の遺構と判断した。当遺跡の近隣では、椿洞遺跡で4基、御望遺跡で1基の焼穢集積土坑が確認されている（岐阜市教育委員会1989、岐阜市教育委員会1995）¹⁾。椿洞遺跡ではいずれも縄文時代早期末、御望遺跡では縄文時代前期後葉に位置付けられている。これらはいずれも当遺跡で確認した遺構と同程度の規模かやや大きく、時期は新しい。こうした焼穢集積土坑は調理施設とされており、当該地は縄文時代早期中葉から生活域として利用されていた可能性がある。

2 古墳時代前期

当該期の遺構には、竪穴建物1軒がある。旧谷地形西側の斜面に位置し、周辺からは同様の遺構は確認できなかった。遺構からは土師器の甕や高杯の破片が出土している。遺構の様相は、関市砂行遺跡の報告書において、「砂行型急斜面集落」（財團法人岐阜県文化財保護センター2000）とされたものに類似する²⁾が、集落を形成するには至っていない。当遺跡以外に同時期の遺構と判断できるものがないため、生活域として利用されていた根拠には乏しいが、墓域としての利用ははじまっていたため、当該期においても生活域として利用されていた可能性がある。

3 古墳時代中期・後期

当該期の遺構には、3号古墳周溝及び9基の古墳（4～12号古墳）がある。3号古墳は旧谷地形東側の舌状尾根の先端付近に位置し、その他の古墳は旧谷地形西側の斜面に位置する。初現と考えられる5号古墳は木棺直葬である。4号古墳及び6～9号古墳の埋葬施設は横穴式石室で、10・11号古墳は、横穴式石室の形態を取るものの中丘や周溝を伴わず小石室である。また、12号古墳は竪穴状の小石室である。遺物は10～12号古墳以外の古墳から出土し、土師器、須恵器、金属製品、石器などがある。古墳の築造時期については、5号古墳が5世紀代に遡る可能性があるほかは、6世紀末から8世紀初頭にかけて継続的に営まれたと考えられる。なお、6世紀後半以降の古墳群の変遷については第2節、5号古墳については第3節で詳細に述べる。近隣の船来山古墳群や上城田寺古墳群に比べて、



第170図 土地利用変遷図

これまでに確認された古墳の数は少ないものの、今後さらに見つかる可能性もある。当該期において、それまでの生活域から墓域に転換されたと考えられる。

4 古代

当該期の遺構には、配石遺構1基がある。発掘区西寄りに位置し、9号古墳の墳丘と埋没した周溝を削平した平場に設置されている。遺構周辺は現況の谷地形の出口付近にあたり、浸食が進んでいる。谷を挟んだ西側は急斜面となり、発掘区2～4では遺構を確認できなかったことから、当該遺構は9号古墳とともに発掘区の中で最も北西に位置する遺構といえる。埋土の上面から灰釉陶器の碗と小瓶が出土しており、古墳を「塚」と認識し、何らかの祭祀を行った痕跡の可能性が考えられる。また、類似遺構は見つからなかったが、小瓶片は7号古墳の墳丘からも出土しており、同様の可能性がある。

5 中世

当該期の遺構には、火葬施設4基、平場3箇所4面、溝3条がある。また、詳細な時期の判断ができるないものの、中世以前の遺構として、道路状遺構1条・溝9条・土坑113基がある。

火葬施設は旧谷地形の底にあたる場所に3基、旧谷地形西側から1基を確認した。斜面の緩やかな場所を選地し、ST3以外は長軸がおおよそ等高線に直交することから、火葬に際して風向きなどを考慮したものと考えられる。遺構の時期は、出土した骨片及び炭化物の放射性炭素年代測定から、13世紀から15世紀後半と考えられる。火葬墓は確認できなかったことから墓域そのものではない可能性もあるが、少なくともそれに準ずる空間であったことは推測できる。

平場は旧谷地形の東西で3箇所4面を確認したが、平場上面では遺構を確認できなかった。いずれも標高17～22mの間に平坦面を形成しており、SM2は4号古墳の周溝を、SM3は6号古墳の墳丘や周溝を削平する。今回確認した古墳の天井石は、4号古墳の欄石を除きすべて失われており、人為的に埋め戻した痕跡もあったことから、こうした造成の際に持ち去られた可能性が考えられる。2面を確認したSM1は、規模において他の2箇所を大きく上回る。SM1の造成面Aに伴う造成土は3号古墳の周溝や道路状遺構SF1を覆い、造成面Bに伴う造成土は、火葬施設ST1～ST3を覆っていたと推測されることから、道路状遺構や火葬施設より新しいと判断した。SM2・SM3についても規模の差はあるもののSM1に類似することから、同時期に造成されたと思われる。また、溝SD3とSD4は旧谷地形の東側に位置し、互いの長軸が直交するように掘削されている。SD8は旧谷地形の西側に位置し、斜面に対し直交するように掘削されている。これらの溝は古墳の墳丘や周溝を大きく削平しており、それぞれSM1とSM3の造成に伴い区画溝として掘削されたと推測される。

以上を踏まえると、少なくとも15世紀後半までは墓域あるいはそれに準ずる空間として利用され、15世紀後半以降、古墳を破壊し火葬施設を覆うように大規模な造成を行った。この造成が何を企図したものか推測の域を出ないが、当該地が墓域としての性格を依然として有していたとするならば、一連の造成が墓地の造営を企図した可能性もある。一方で、これほどの規模の造成をしながら、平坦面上に遺構や同時期の遺物を確認できなかったことから、造成後に何らかの理由³⁾で活用されるまでには至らなかつた可能性もある。

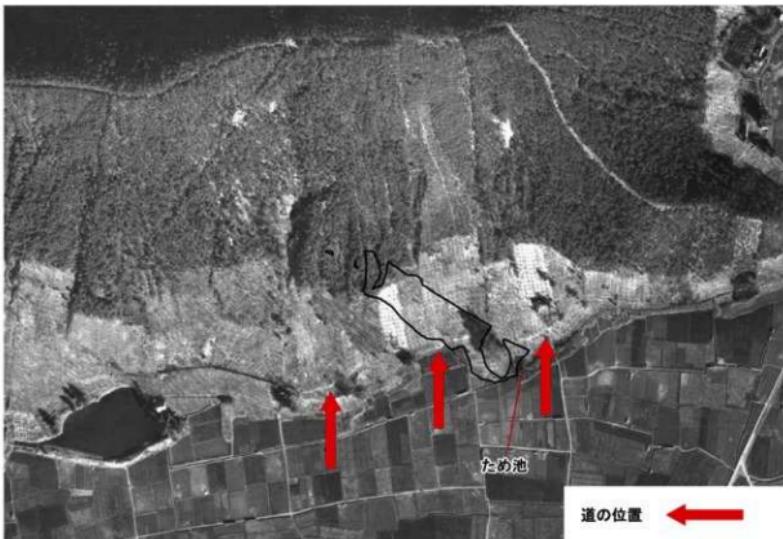
次に、詳細な時期の決定ができない遺構について述べる。道路状遺構は複数の硬化面を伴う溝となり、両端は発掘区外に延びる。硬化面を伴う溝からは土師器や石器などが出土した。西から6号古墳、4号古墳の南側を通り、旧谷地形を渡って3号古墳の北側を東に抜け、意図的に古墳を避けてい

るよう見受けられることから、成立時期は古墳築造と同時期かそれ以降と推測される。SM1・SM2の造成土によって埋没していたことから、15世紀中葉以前の遺構であることは間違いない。また、旧谷地形の西側で確認した硬化面のうち、いくつかはST1からST3へ向かって延びていることから、火葬施設利用時にも使われていた可能性が考えられる。溝SD1・SD2は2・3号古墳の立地する舌状尾根の北東と南西に位置する。直線的に延びており、区画溝の可能性が考えられる。SD1は2号古墳の墳丘若しくは墳丘からの流土と思われる層を削平していることから、2号古墳築造以降の遺構と考えられるがSD2については不明である。SD12は、9号古墳の東側に位置しており、斜面に対して直交する。斜面上方は現況の谷によって削平されるが、その規模はSD8に類似し、また斜面下方では溝の長軸方位がSD4・SD8の長軸方位と揃う。SD4・SD8・SD12はほぼ等間隔に位置していることから、区画溝であった可能性もある。土坑は斜面下方に比較的多く分布するが、規則性を感じるようなものは見あたらない。平成28年度に調査した発掘区2～4では遺構を確認できなかった。

6 近世以降

今回の発掘区はIb層によって埋没しており、当該期の遺構は確認できなかった。しかし、1754（宝暦4）年の『濃州方県郡洞村絵図』（前掲第9図）で確認した御望山南麓の道について、触れておきたい。

第3章第1節でも述べたように、Ib層は近世以降の崩積性堆積物である。『大日本地震史料』⁴⁾によれば、16世紀初頭から1754（宝暦4）年までの約250年間に起こった地震のうち、「美濃」の地名が登場するものは、1586（天正13）年、1662（寛文2）年、1707（宝永4）年の3回である。この



第171図 発掘区周辺の空中写真

（黒枠が発掘区の位置、縮尺約1/5,000、昭和23（1948）年米軍撮影 USA-M936-102）

うち 1586 年の地震はいわゆる天正地震とよばれ、飛騨では帰雲城及びその城下町が埋没し、美濃では大垣城が全壊焼失したとされる⁵⁾。I b 層の堆積が比較的薄い斜面上方の 8 号古墳の周溝から広東茶碗の破片が 1 点出土したが、それより斜面下方の遺物包含層中からは 16 世紀後半より新しい遺物はない。美濃地域で起こった地震の年代と出土遺物の様相を踏まえると、当該地の埋没は近世以降でもかなり早い段階に起こったと推測でき、天正地震が主たる原因であった可能性が高い。

『濃州方県郡洞村絵図』では、御望山の黄色く着色された場所は「ぬけど」と凡例にあることから、山崩れの跡とわかる。御望山南麓の道は、「圓成寺」から東に向かって「伊自良道筋」まで続いているが、中央やや右寄りの「池」の周辺では、池の北側を道が通っている。この「池」の名残が、発掘区東側にあった一村総持のため池である可能性については第3章第4節すでに述べた。崩積性堆積物によって埋没した後に再びできた道は、奇しくも埋没する以前の道と同じようなルートをたどっている。このことは地形的な制約あるいは単なる偶然の一致かもしれない。しかし、崩積性堆積物によっても埋めせず残った 2・3 号古墳の墳丘が目印となり、使い慣れた道筋をたどった結果が一致を生んだとは考えられないだろうか。現在、ため池周辺では柿畠が営まれており畑内を作業用の農道が通っていたが、1948(昭和 23)年の米軍の空中写真でも、道らしきものが一部に確認できた(第 171 図)。古墳の存在が古墳時代から現代に至るまで、道筋に影響を与えたとするならば興味深い。

注

- 1) この他にも、岐阜市鷲山の下土居若宮遺跡から焼穢と多量の炭化物を伴う同規模の集石土坑が確認されている事例があるが、時期は繩文時代中期後葉から晩期に比定されている(財団法人岐阜市教育文化振興事業団 2011)。
- 2) 「砂行型急斜面集落」にあてはまる開市の砂行遺跡、南青柳遺跡、深橋前遺跡及び加茂郡富加町の後平遺跡の堅穴建物及び集落は、山中式後半期から廻間 I 式期にかけてつくられるが廻間 II 式期に続かないとされる(財団法人岐阜県文化財保護センター 2000)。当遺構は住居形態のうち、斜面地に立地すること、山側の壁面が等高線に対し平行となること、方形の平面形をとることについてはあてはまるが、時期や集落を形成していないことなど相違点もある。
- 3) 1496(明応 5) 年には、当該地にほど近い城田寺で、美濃の守護代斎藤氏の権力争いに端を発する「城田寺の合戦」が起こっており、こうした外的な要因も理由であったかもしれない。
- 4) 岐阜市教育委員会 1980『岐阜市史』(通史編 原始・古代・中世)
- 5) 震災予防調査会 1973「附録 大日本地震史料地震目録」『大日本地震史料』(複刻)、初版 1904、株式会社思文閣 30-42 頁
- 5) 天正地震以外の地震については、1662 年の地震では「美濃諸国で地震。人畜家屋に被害」、1707 年の地震では「美濃国内では家屋四〇〇戸が全壊。大垣城も大破」したとの記録がある。
- 岐阜県 1998『特集と年表でつづるひだみのの灾害 岐阜県灾害史』70-73 頁、130-137 頁

第2節 洞第2古墳群の変遷について

今回調査した古墳は、5号古墳を除けば、いずれも石室を伴っていた¹⁾。本節では、当古墳群の変遷についてまとめ、近隣古墳群との比較を通じて、当古墳群の変遷の特徴について検討したい。

1 古墳群の変遷

今回の調査で確認した古墳は、発掘区中央やや東寄りの旧谷地形を挟んでその両側に分布する。旧谷地形の東側には緩やかな舌状尾根が南に向かって延び、その南端の尾根上に既知の2号古墳と3号古墳が立地する。一方、旧谷地形の西側は北西から南東に向かって傾斜する斜面となっており、9号古墳を除く4号古墳から12号古墳はこの斜面上に立地する。9号古墳は今回調査した古墳の中で最も西に位置している。8号古墳と9号古墳の間には僅かながら尾根上の起伏が存在し、9号古墳は尾根の東側に位置する古墳とは異なる斜面上に立地する。以下、舌状尾根上の2号古墳・3号古墳をAグループ、時期が古い5号古墳と位置が外れる9号古墳を除いた4～12号古墳をBグループ、9号古墳をCグループとする（第173図）。

当古墳群の初現は5号古墳であり、5世紀末から6世紀前半にかけて築造されたと推測する。墳形や埋葬施設が他の古墳とは異なり、不整形な方墳で葺石が葺かれ、木棺直葬である。5号古墳は標高約24mの斜面中腹に位置し、特に東側は谷に向かって傾斜がきつくなるため、一見古墳築造には不向きに思われる場所を選地している。このような場所を選んだ理由として、集落があると推定される南側の平坦地を意識して見通しの良い場所を選んだことや、急傾斜を利用して土の移動（運び降ろし）にかかる労力を最小限にしたことなどが考えられる。しかし、5号古墳に続く古墳は確認できず、次の古墳が出現するまでおよそ半世紀の空白期を挟む。

6世紀末に4号古墳が造営される。4号古墳は5号古墳の斜面下方、標高約20mに位置し、Bグループの中で南東端に位置する。4号古墳の東側は旧谷地形の谷底にあたり、4号古墳は6号古墳とともに、標高が低く斜面の傾斜も比較的緩やかな場所を選地しながら、5号古墳の墓域を侵さぬよう配慮しているように感じられる。4号古墳は、今回調査した古墳の中では最も墳丘及び石室の規模が大きく、石室は右片袖式の構造を採用している。既知の2号古墳・3号古墳とともに当古墳群の中心的な古墳と考えられる²⁾。3号古墳は周溝のみの調査であったことから時期は不明であるが、4号古墳を上回る墳丘規模を有するとみられることから、同時期かさらに古い時期の可能性もある。4号古墳や3号古墳は、いずれも平坦地に近い緩やかな斜面やその端部を選地していることから、5号古墳の築造時とは選地基準が異なっていたと考えられる。10号古墳は横穴式石室を意識して造られた墳丘、周溝を伴わない小石室である。4号古墳の周溝との重複関係から、4号古墳に先行するものの規模が小さいことから単独で造られたとは考えにくい。2号古墳・3号古墳が4号古墳より古い時期に築造された古墳と仮定すれば、これらに準じて造られた可能性も否定できないが、立地する場所が旧谷地形を挟んで離れており根拠は乏しい。

4号古墳に続いて6号古墳・7号古墳・8号古墳が斜面下方から上方に向かって造られていく。6号古墳・7号古墳・8号古墳は標高約20mから約31mの間にほぼ等間隔に配置されており、7世紀初頭から7世紀中葉にかけて下から順に築かれたものと推測する。6号古墳・7号古墳は玄門部が損なわれていたが立柱石があったと推測され、両袖又は擬似両袖式の構造であったと思われる。8号古墳

は無袖式である。11号古墳は墳丘、周溝を伴わない小石室である。時期の根拠となる遺物は出土していないが、6号古墳と7号古墳のほぼ中間に位置し、石室の規模や構築技法は7号古墳に類似する。このため、7号古墳と同時期かやや遅れて築造されたと推測した。9号古墳は、8号古墳と標高はほぼ同じ約30mに位置する。9号古墳は擬似両袖式の石室で、時期の根拠となる遺物は出土しなかったが、石室規模が8号古墳と類似することからほぼ同時期と判断し7世紀中葉とした。12号古墳は7号古墳の周溝埋没後に造営された竪穴式の小石室である。斜面に構築されていることから、7号古墳の周溝の埋没が早く進んだ状況も考えられ、7世紀後葉から8世紀初頭に築造されたと推測した。

このように5世紀末から6世紀前半に5号古墳を築造し、その後、半世紀近く造墓活動が途絶えるが、再び6世紀末から8世紀初頭にかけて継続的に古墳や石室を築造し、古墳群を形成したと推測される。また、6世紀末以降の造墓活動は、古墳の立地する場所から先にグルーピングしたA～Cの3つの造墓集団の存在を伺わせる。

2 近隣古墳群との比較から見た洞第2古墳群

古墳の変遷でみたように、木棺直葬の5号古墳以外は継続的に営まれていたと考えられる。中でもBグループの4・6・7・8号古墳は、石室内から出土した遺物をもとに変遷順を追うことができることは大きな成果といえる。また、その周間に10・11・12号古墳といった小規模な石室が築かれていたことは、造墓集団の社会的階層を考える上でも、貴重な資料といえよう。近隣の同時期の古墳群である、岐阜市の上城田寺古墳群、岐阜市と本巣市にまたがる船来山古墳群、大野町のカイト古墳群と比較、検討してみたい（第172図）。

当古墳群及び比較対象とした上城田寺古墳群、船来山古墳群、カイト古墳群を表31にまとめた。上城田寺古墳群は第2支群の長屋1号古墳と第4支群の14基、船来山古墳群は当古墳群との時期的な重なりがみられるM支群、カイト古墳群は西側の比較的まとまりのみられた17基を取り上げた。ここでは、特に石室形態・規模・副葬品、古墳の変遷について比較する。

まず、洞第2古墳群について改めて確認しておく。石室の形態は12号古墳を除いて横穴式石室である。4号古墳が右片袖式、6号・7号古墳は両袖式又は擬似両袖式、9号古墳は擬似両袖式、8号・10号・11号古墳は無袖式である。石室規模は、最も大きい4号古墳が全長8m、それに次ぐ6号古墳が推定約5.3mであるが、その他は5m以下と小規模である。また、10号～12号古墳は墳丘を伴わない小石室で12号古墳は竪穴式であった。4号古墳の石室内からは須恵器、土師器、金属製品（鉄刀、鉄鎌、刀装具、刀子）が出土したが、馬具や装身具はなかった。6号古墳からは須恵器、土師器、金属製品（耳環、鉄刀、鉄鎌）が出土したが、点数は4号古墳と比べて少ない。7号古墳と8号古墳からは須恵器がそれぞれ1点と3点出土し、9号古墳からは土師器片と須恵器片が少量出土した。10号～12号古墳から遺物は出土していない。

上城田寺古墳群は4つの支群からなる。第2支群に属する上城田寺長屋1号古墳は南に張り出した標高32mの小丘陵の頂上部に位置し、石室は全長10m、右片袖式であり、岐阜市内でも最大級である。出土遺物は須恵器、土師器、金属製品（馬具、耳環、鉄刀、刀装具、鉄鎌、刀子）がある。古墳の築造時期はTK43型式併行期と考えられ、その規模や立地、副葬品から同古墳群の盟主墳と考えられている。また、第4支群の14基は標高約60～70mの山腹に立地している（第174図）³⁾。石室は両袖式と無袖式があり、石室全長5.6～6.9mの中型と3.5m以下の小型のグループに大別される。石室内遺

表31 洞第2古墳群及び近隣の古墳一覧

遺跡名	遺構名	墳丘			石室			時期	出土遺物						玉類	その他					
		墳形	規模(m)		形態	規模(m)				須恵器			金葉製品								
			長径	短径		側面	全長	最大幅	高さ	坪	身	蓋	金盤	鏡	平瓶	瓶	耳	刀	鉤	刀	鉤
洞第2古墳群	4号	円墳	12.85	11.45	右片袖式	8.00	1.66	(2.40)	6C末葉	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○			甕		1	1	19	4			
	6号	円墳	(7.54)	(7.21)	両袖か 腰似両袖	5.34	1.31	1.35	7C初頭	○			甕		3	1	11				
	7号	円墳	(5.23)	(8.42)	両袖か 腰似両袖	1.23	0.64	0.52	7C初頭	○											
	8号	円墳	8.42	5.71	無袖	4.38	0.80	(0.78)	7C中葉	○ ○		○									
	9号	円墳	5.94	6.73	腰似両袖	0.03	0.90	1.32	7C中葉	○			甕								
	10号	-	-	-	小石室 (無袖)	1.86	0.50	0.45	6C後半	2											
	11号	-	-	-	小石室 (無袖)	1.00	0.60	0.25	7C初頭	2											
	12号	-	-	-	豊穴式 小石室	0.95	0.38	0.31	7C後～ 8C初頭	2											
	擴掘	円墳	-	-	右片袖式	10.00	2.40	2.60	6C中葉	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○		甕		2	1	3	12	2	馬具	
	1号	-	5.1	-	無袖式	3.50	0.90	0.80	-												
上城田寺古墳群(～第2・4支群)	2号	円墳	11.7	10.2	無袖式	6.90	1.60	1.90	6C中～ 末葉	○ ○ ○ ○ ○ ○			小型甕、 甕、不明	高杯、甕	2	4	1	34	8	大刀破片	67 ■■■
	3号	-	-	-	無袖式	3.40	1.10	1.20	-												
	4号	多角形か 円形	12.2	8.4	無袖式	5.60	1.40	-	6C後半	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○			甕							172	
	5号	円墳	10.2	9	両袖式	6.20	1.30	1.60	7C後半	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○			甕							4	
	7号	-	-	-	両袖式	3.10	1.00	1.30	-												
	8号	円墳	8.8	8.6	無袖式	6.40	1.40	1.60	6C末～ 7C初頭	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○			1								
	9号	-	3.3	-	無袖式	2.20	0.80	(0.90)	-												
	10号	-	-	-	無袖式	2.80	0.90	(1.00)	-												
	11号	-	-	-	無袖式	2.70	0.70	0.70	-												
	12号	-	3.8	-	無袖式	2.90	0.80	0.90	-												
柏原山古墳群(～第2・4支群)	13号	円墳	5.5	-	無袖式	3.20	1.00	-	-												
	14号	-	-	-	無袖式	2.20	0.80	(1.10)	7C前半	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○			小型飾	1							
	15号	円墳	3	-	両袖式	2.00	0.60	0.70	-												
	73号	-	-	-	両袖式	6.60	-	1.20	7C中葉	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○			不明							8	
	112号	-	-	-	無袖式	(1.70)	0.70	(0.80)	-												
	145号	-	-	-	堅穴系 横口式	(3.60)	2.30?	(0.65)	5C末葉	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○	○	不明	不明	2	4	76	8	弓箭金具	623	
	173号	-	-	-	堅穴系 横口式	(4.10)	1.40	(0.60)	6C中葉	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○	○	甕、不明	甕	2	1	5	5	翻鏡片	146	
	174号	-	-	-	両袖式	(6.30)	1.45	(2.05)	6C後葉	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○	○	不明		1	5			弓箭金具 翻鏡片		
	175号	-	-	-	-	-	-	-	-						1	2		板状破片 小破片	42		
	176号	-	-	-	無袖式	(1.75)	1.30	(0.80)	6C後葉	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○	手付輪 不明			1					16	
カイドト古墳群(～第2・4支群)	177号	-	-	-	無袖式	(3.30)	1.30	(1.07)	6C中葉	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○	輪、不明 カワラケ			6		1	1	翻鏡片	178	
	178号	-	-	-	無袖式	4.50	1.50	(1.50)	6C後葉	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○	甕	不明	2	1	15	1	翻鏡片	970		
	179号	-	-	-	-	-	-	-	7C前葉	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○	不明									
	180号	-	-	-	-	-	-	-	6C後葉	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○		甕							2	
	17号	円墳	12	12	両袖	8.00	1.60	1.70	6C末～ 7C初頭	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○		甕		4	4				8 人骨	
	19号	方墳	7.5	7.5	無袖	4.80	1.00	1.40	-											人骨	
	20号	円墳	6	8	腰似両袖	4.90	1.10	1.40	7C中葉	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○			台付鏡	1							
	44号	円墳	5	5	無袖	3.00	0.70	1.00	-												
	45号	円墳	3	3	無袖	2.20	0.60	0.90	7C前葉	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○		1								
カイドト古墳群(～西脇)	47号	円墳	5	5	無袖	3.00	1.00	0.60	-												
	49号	円墳	6	6	無袖	4.50	1.20	0.70	7C木葉	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○		皿(縁文)							3	
	50号	円墳	5	5	無袖	3.50	0.70	1.10	7C中～ 後葉	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○										
	51号	円墳	5	3.5	無袖	4.00	0.80	1.60	7C前葉	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○										
	52号	円墳	4	4	無袖	3.00	0.70	1.20	-												
	53号	方墳	5	4	無袖	4.20	0.80	1.20	7C後葉	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○										
	54号	円墳	6.5	5	無袖	4.00	0.70	1.30	-												
	55号	円墳	8	8	無袖	5.00	0.90	1.30	7C中葉	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○		鉢							人骨	
	56号	不明	-	-	無袖	3.60	0.80	1.00	-							2					
	58号	不明	-	-	小石室	0.90	0.40	0.60	-												
	59号	不明	-	-	小型穴	1.50	0.60	0.50	7C後葉				甕								

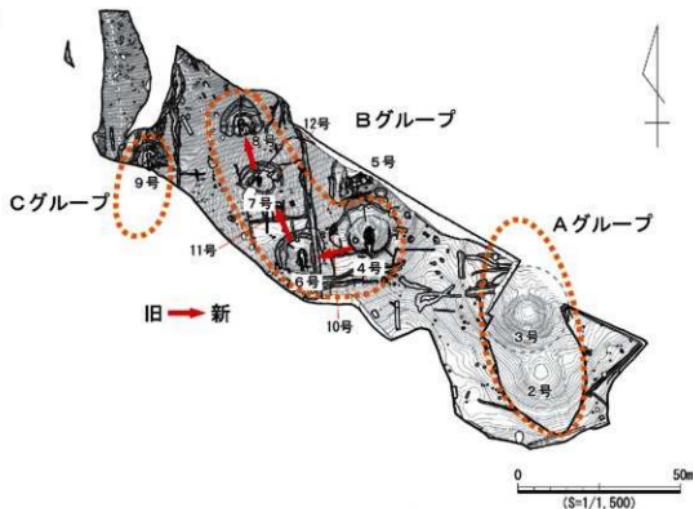


第172図 対象古墳群位置図

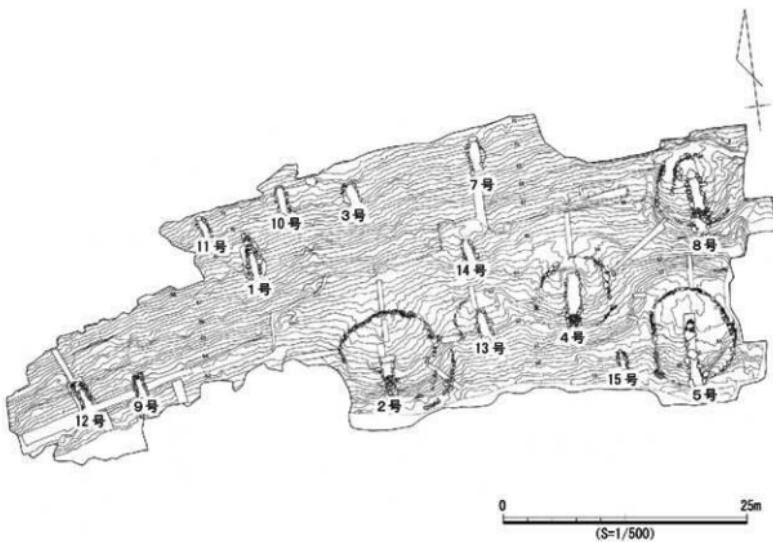
(平成14年発行国土地理院1:50,000地形図「大垣」)を元に、50%縮小して作成

物は2・4・5・8・14号古墳から出土しており、2号古墳からは須恵器、土師器、金属製品（耳環、鉄刀、鉄鎌、刀子）、玉類、筋鍤車などさまざまな遺物が出土し、4号古墳からも須恵器、金属製品（鉄鎌、刀子）、玉類が出土している。築造時期は6世紀中葉から7世紀後半とされている。第4支群の古墳の変遷は、2・4号古墳がほぼ同時期で最も早く、次いで8号古墳、5号古墳へと続いていることが確認されている。また、2号古墳の西側斜め下方には、4基の古墳の墳丘が地表から確認できるとされ、この4基に2・4・8号古墳を加えた帶状の古墳列は、西から東に墓域を拡大しながら推移したと想定されている⁴⁾。一方、3.5m以下の小型横穴式石室は、中型の石室に引けを取らない丁寧な造りであること、遺物を伴わないものが大半ではあるが、14号古墳出土の遺物が7世紀前半の様相を示すこと、中型の石室に近接して築かれているものがいくつかみられることなどから、「小型石室は7世紀前半から後半にかけて中型石室に共存して造られるようになってきた」と推測されている⁵⁾。

船来山古墳群は、これまでに290基の古墳が確認されている。船来山古墳群はA～Zの支群⁶⁾に分けられるが、支群ごとに古墳の数や規模、副葬品の量や質など違いがみられる。後・終末期の古墳の特色としては大多数が明瞭な墳丘を伴わないこと、前期古墳と異なり傑出した首長墓がみられないことなどが挙げられている⁷⁾。M支群は主尾根のJ支群から南西方向に伸びる支尾根の南端一帯にあたり、標高約39mから約61mの間に11基の古墳が所在し、うち9基は5世紀末から7世紀半ばにかけて築かれた後期古墳とされる（第175図）⁸⁾。石室の残存状況はよくないが、大きいもので残存長6.3mを測り、残りは1.7～4.5mに収まる。竪穴系横口式石室の系譜をひくもの、両袖式、無袖式、小石

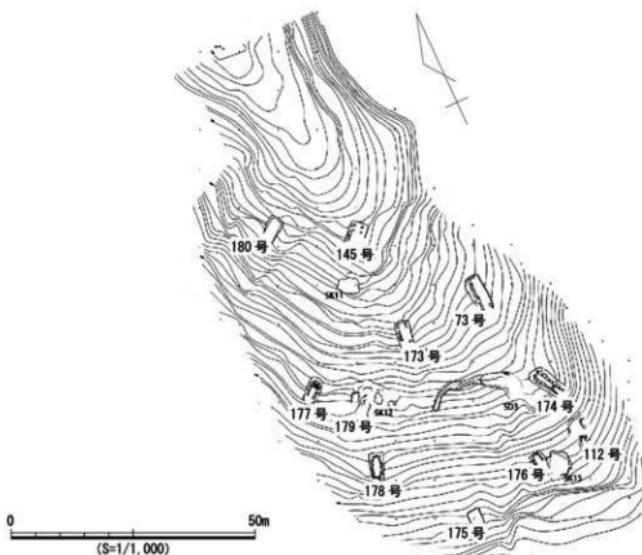


第173図 洞第2古墳群古墳変遷図

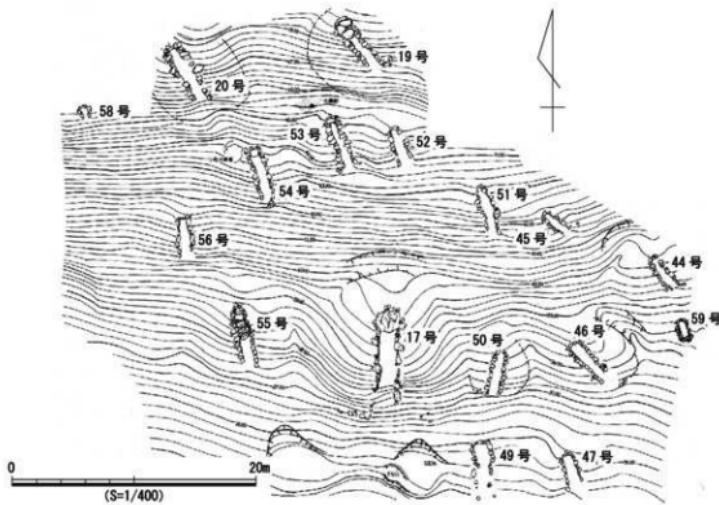


第174図 上城田寺古墳群第4支群

(岐阜市教育委員会 1994『上城田寺古墳群』より転載、一部改変)



第175図 船来山古墳群 M支群
(本巣市教育委員会2017『本巣市船来山古墳群総括報告書』(本文編)より転載、一部改変)



第176図 カイト古墳群
(大野町教育委員会2006『大野町北部山麓古墳群発掘調査報告書』より転載、一部改変)

室などがみられる。M支群の中で最も高所に築かれた145号古墳は竪穴式横口式石室⁹⁾で5世紀末の築造とされ、須恵器、金属製品（鉄刀、鉄鎌、石突、刀装具、刀子など）、玉類（碧玉管玉、土玉、ガラス丸玉、ガラス小玉など）が、石室床面からは雲母片が出土した。また、6世紀後半（TK43型式併行期）の古墳が6基あり、177号古墳からは組合式石棺や鉢、碧玉管玉が、178号古墳からは鉄鎌、玉類（瑪瑙勾玉、碧玉管玉、琥珀糸玉）が、176号古墳からは須恵器把手付碗、土玉が出土している。M支群は、他の支群の同時期の後期古墳と比べても、豊富な装饰品や特異な須恵器の出土等に特徴がみられ、船来山古墳群の中でも「最も栄えたグループ」の墓域の一つとされる¹⁰⁾。吉田英敏は、船来山古墳群の変遷について「支群ごとの盟主墳的な古墳から、徐々に尾根を下降する様子がうかがえる」と指摘している¹¹⁾。M支群は支尾根の南端一帯に分布するためか、主尾根付近の支群にみられるよう、盟主墳的な前期古墳はみられない。しかし、後期古墳の中でも最も時期の古い145号古墳が支群内の最高所に位置し、後発の古墳が一部の例外はあるものの、徐々に下降している様子がみてとれる。

カイト古墳群は、南東に延びる尾根の南斜面に64基の古墳が確認されている。平成8年から10年にかけて37基の古墳の調査が行われ、小規模な横穴式石室や小竪穴式石室が多数確認された。造墓活動は、6世紀後葉から7世紀末頃にかけて行われたとされる。このうち比較的まとまって分布しているカイト調査区西部の17基を対象とする（第176図）¹²⁾。石室は全長3～5m程度のものが大半を占めるが、8mのものが1基、2m以下の小型のものが2基ある。無袖式が圧倒的に多いなかで、両袖式、擬似両袖式、小石室、小竪穴式石室のような形態もみられる。17号古墳は同古墳群の中でも初源的な古墳の一つと考えられ、畿内系の両袖式石室を埋葬施設にもち6世紀後葉の築造とされる。玄室左奥¹³⁾には石室内改葬施設と考えられる石組みがあり、男女2体の人骨が出土している。また遺物は、須恵器、土師器、金属製品（鉄鎌、刀装具）、玉類（碧玉管玉、小玉、土玉）が出土しており、同古墳群の古墳から出土する遺物は絶じて少ないと見られ、17号古墳が盟主的な存在であったと推測されている。17号古墳を取り巻くように後発する古墳が築造されるが、これらの古墳は斜面下方より平行若しくは斜面上方に築かれるものが多い。竹谷勝也は、古墳が斜面に対して平行に並ぶ様子を看取できることから、「基幹道から分岐して合理的に斜面を登坂できる道沿いに小支群が形成された」と推測し、「17号古墳のまわりの小石室はとりまいているのではなく、斜面に沿う道が何段か存在し、その道沿いに築造された結果、取り巻くような景観が形成された」と指摘している¹⁴⁾。

さて、各古墳群の様相をみてきたが、石室の形態・規模・副葬品、古墳の変遷の順に洞第2古墳群と比較してみたい。

はじめに、石室形態・規模について検討する。横幕大祐によれば、美濃地方の横穴式石室にはいくつかの系統があるが、「畿内系とされる片袖式石室は他の石室より副葬品内容などで優位にあり」¹⁵⁾、有力な地域の首長墓として横穴式石室導入期に採用される。しかし、TK43～TK209型式併行期頃には、前方後円墳に代わり大型方墳に代表される新たな首長墓の登場とともに、両袖式石室が登場・採用されていく、片袖式に取って代わると述べている。また、同時に「下位の石室として従来の無袖式石室に加え、擬似両袖式石室や立柱石を使用した無袖式石室などが出現する」¹⁶⁾ことを指摘している。こうした背景を考えると、片袖式石室を採用する4号古墳は上城田寺長屋1号古墳の後継にあたる地域の首長墓であった可能性が考えられる。しかし、片袖式石室を採用するとはいえ、奥壁付近が窄まる平面形¹⁷⁾、片袖式石室の副葬品に一般的な馬具や装身具を伴わない事実は、片袖式から両袖式へと移

行する過渡期の様相と捉えられよう。また、6号古墳築造以降は、両袖式又は擬似両袖式石室、立柱石を使用した無袖式石室が採用されており、その規模を他の古墳群と比較しても特別に優位性はみられない。こうしたことから、4号古墳の被葬者が地域の首長の後継であったとしても、政治的な影響力は限られた範囲に留まったものと思われる。一方、いずれの古墳群でも5m以下の小規模な古墳が多い事実は、横幕が指摘するように、古墳築造階層の底辺拡大とともに、「石室形態による階層表現に加えて、規模による階層表現が顕著になった結果」¹⁸⁾と捉えられよう。当古墳群における小石室も、終末期的な様相というよりは、階層分化に伴う造墓活動の結果と捉えたい。

次に、副葬品について比較する。4号古墳と同時期あるいは近い時期の古墳は、上城田寺古墳群の2号古墳・4号古墳、船来山古墳群の173号古墳・176号古墳・178号古墳、カイト古墳群の17号古墳などである。4号古墳の副葬品はこれらの古墳と比較すると、耳環や玉類などの装身具、紡錘車、弓飾金具などは出土していないものの、その他の土器や金属製品については種類・数量ともに比較的豊富で遜色ないため、時期的傾向の可能性がある。また、6号古墳～12号古墳についても、時期が下るにつれてどの古墳群でも副葬品の種類・数量は減少しており、同様な時期的傾向と思われる。

最後に、古墳の変遷についてである。船来山古墳群は、支群ごとに斜面を下降するように古墳が築かれる傾向がみられたが、カイト古墳群では基幹道から分岐した支道に沿って小支群の形成がみられ、斜面下方から上方に連なる様相を示していた。また、上城田寺古墳群第4支群では、西から東に向かって築かれているが、発掘区周辺の古墳も含めると斜面下方（南西）から斜面上方（北東）に向かつて変遷すると推定されている¹⁹⁾。当古墳群においてもBグループでは斜面下方から上方に連なる傾向がみられることから、後期から造墓活動を開始する地域においては、比較的一般的な変遷の仕方と考えられる。ただし、当古墳群は、横穴式石室を採用する古墳群の造営に先だって5号古墳が築造されている。この古墳は4号古墳の斜面上方に位置しており、船来山古墳群と同様に首長墓的な位置付けであった可能性がある。また、4号古墳・6号古墳の南を通り、3号古墳の北を抜ける道路状遺構の初現は不明であるが、カイト古墳群が基幹道から分岐した支道に沿って小支群を形成したことを考えれば、古墳時代にさかのぼる基幹道あるいは支道の可能性がある。

注

- 1) 周溝のみの調査に留まった3号古墳についても、第3章第3節で述べたように現地で側壁の一部と思われる縫を確認しており、石室を伴う古墳である可能性が高い。
- 2) 岐阜県埋蔵文化財包蔵地調査カード(1975年調査)によれば、洞北山2号古墳、同3号古墳の規模は、それぞれ直径15.4m、高さ2m、直径18m、高さ3.5mで、今回調査した4号古墳よりも大きく、また記録に残る他の古墳と比較しても大きいことから、中心的な古墳と考える。
- 3) 図は、岐阜市教育委員会1994「別添図1 調査後全体図」『上城田寺古墳群』を転載、一部改変した。
- 4) 天木日出夫1994「第5章 まとめ 第3節 第4支群の変遷」『上城田寺古墳群』、岐阜市教育委員会120-121頁
- 5) 前掲4)
- 6) 船来山古墳群は岐阜市と本巣市（旧糸貫町、旧本巣町）にまたがっており、AからF支群が岐阜市側に、GからZ支群が本巣市側に位置する。また、UからZ支群は1995年の本発掘調査時には設定されておらず、本巣市教育委員会（2017）で新たに設定された。

- 7) 広瀬和雄は、船来山古墳群における後・終末期の特性について、①5世紀末から7世紀後半という約200年にわたり共同の墓域であり続けたこと、②傑出した大きさの石室がなく、6世紀後半から7世紀初め頃には、石室や副葬品が等質的な構成となること。③古墳の造営主体は、中間層・有力家族層であることを挙げている。
- 広瀬和雄 2017「第6章 古墳群についての考察 第3節まとめ」『本巣市船来山古墳群総括報告書』本文編、本巣市教育委員会 156-162頁
- 8) 図は、本巣市教育委員会 2017「第3章 古墳群の構成と主要古墳の概要」『本巣市船来山古墳群総括報告書』(本文編)から転載、一部改変した。
- 9) 糸貫町教育委員会・本巣町教育委員会(船来山古墳群発掘調査団) (1999)では「右片袖式」と記載してあるが、袖部の左右については本稿の記載に合わせた。
- 10) 吉田英敏 1999「第8章 考察 第1節 遺構」『船来山古墳群』(本文編)、糸貫町教育委員会・本巣町教育委員会(船来山古墳群発掘調査団) 395頁
- 11) 前掲10)
- 12) 図は、竹谷勝也・飯沼暢康・米井友美 2006「第6章 カイト古墳群」『大野町北部山麓古墳群発掘調査報告書』大野町教育委員会から転載、一部改変した。
- 13) 報告書では、「玄室右奥」となっているが、本稿の記載に合わせた。
- 14) 竹谷勝也 2006「第8章 考察 第2節 北部山麓古墳群における古墳時代後期～終末期の様相」『大野町北部山麓古墳群発掘調査報告書』、大野町教育委員会 184頁
- 15) 横幕大祐 2001「美濃地方における後期古墳の状況」『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学フォーラム三河大会、東海考古学フォーラム三河大会実行委員会 235頁
- 16) 前掲15)
- 17) 成瀬は、奥壁が窄まり玄門に向かって玄室幅が広がる形態は、6世紀末に瑞浪市の段2号古墳(石室全長約7m)にみられるのこと、それまでの片袖式石室に比べやや規模が劣ることを指摘している。
- 成瀬正勝 1985「横穴式石室の型式と変遷について」『岐阜史学』第79号、岐阜史学会
- 18) 前掲15) 236頁
- 19) 前掲4)

第3節 5号古墳について

今回新たに確認した古墳のうち5号古墳は、不整形な方墳、木棺直葬、副葬品として遺物に鉄剣や提砥を有する点など、他の古墳にはない特徴を備えており、時期的にも他の古墳より古い可能性が高い。本節では、5号古墳の墳丘や埋葬施設、出土遺物などから被葬者像について考えてみたい。

1 墳丘と埋葬施設

5号古墳は、第3章第3節で述べたように5世紀末から6世紀前半に築造されたと考えられる。旧谷地形西側の急斜面地に立地しており、北東側が発掘区外に広がるために確認できた墳形は不整形な方墳で、墳丘の南側と西側に葺石を葺く。埋葬施設は木棺直葬であり、構築墓坑と考えられる。木棺痕跡から遺物は出土しなかったが、木棺痕跡の南側に埋納遺構を確認し、鉄剣、鉄鏃、刀子、提砥が出土した。

まず、墳丘に着目してみたい。5世紀代の美濃地域における古墳の様相は地域によって異なる。当古墳群も含まれる長良川中流域では前方後円墳もみられるが、直径20~40mの円墳を中心に、小型の円墳が数基まとまって古墳群を形成するのが主流である¹⁾。また、閻市の砂行1号古墳（直径22m、葺石有り）や南青柳古墳（直径19.6m）、加茂郡富加町の後平茶臼古墳（直径13.5m）のように、造り出し付円墳の形態をとるものもある。しかし、方墳については成瀬が指摘するように、「方形企画（原文ママ）の小型墳は現在のところ美濃地域の前・中期古墳には主体的には認められない」²⁾。美濃地域では6世紀末から7世紀初頭にかけて、前方後円墳に変わる新たな首長墓として1辺が20~30mほどの大型方墳がつくられる³⁾が、これらはいずれも横穴式石室を埋葬施設としており、5号古墳と比べると規模、埋葬施設の点で異なる。近隣の揖斐郡大野町に所在する野古墳群では、数少ない中期の方墳を確認できる。この古墳群は平野部に立地し、70~90m規模と40~60m規模の前方後円墳の周囲に、帆立貝式古墳や円墳、方墳が陪塚的にまとまって造営されており、5世紀代を中心に重層的に築造されたと考えられている。野8号古墳は1辺15.8m、同15号古墳は1辺15mの方墳で、15号古墳からは葺石や埴輪が確認されており、5世紀末頃と推定されている。野古墳群における方墳は、直径20m前後の小型の円墳とともに、同古墳群においては前方後円墳を頂点とする古墳秩序の下位に位置付けられている。5号古墳と比べると立地や上位に位置する古墳の有無など違いはあるが、小型の方墳という点で類似性がある。成瀬は美濃地域における古墳時代中期の特徴を大きく3つにまとめ、その1つとして前期古墳に大型の前方後円墳が形成されなかった地域で、中期になって円墳を主体とする首長墓の形成がみられることを言及している⁴⁾。洞内では前期古墳は確認されておらず、小山古墳（円墳、直径28m）が5世紀代に築造される。5号古墳は円墳ではないが、小山古墳とともに新たに形成された首長墓の一つと推測できる⁵⁾。

次に、埋葬施設についてみてみたい。美濃地方における古墳時代中期末から後期の木棺直葬を埋葬施設にもつ古墳は、表32のとおりである。美濃地方では、木棺直葬の埋葬施設をもつ古墳の多くは、直径20m以下の円墳であり、方墳の調査事例は確認されていない⁶⁾。また、西ヶ洞古墳群では木棺を固定する際に裏込めの石材を設置する行為が、龍門寺1号古墳では排水用に床面に礫を敷く行為が確認されているが、5号古墳ではこのような行為はみられず、木棺直葬の形態としては極めて一般的な方法を探っていたといえる。

しかし、他の古墳と異なる特徴として、埋納遺構を設けている点が挙げられる。埋納施設⁷⁾をもつ県内の古墳の事例には、大垣市の遊塚古墳（前方後円墳、全長80m）がある⁸⁾。遊塚古墳は5世紀初頭の築造と考えられ、前方部に墳丘の主軸と平行して埋納施設が確認されており、多数の遺物が出土している（表33）⁹⁾。また、閻市の小洞西1号古墳（円墳、直径9.5m）からは、2基の土器埋納遺構が確認されている。小洞西1号古墳は3基の埋葬施設をもち、いずれも木棺直葬である。埋葬施設からは鉄鏃、刀子が出土している。初葬が6世紀後半に行われ、6世紀末から7世紀初頭に2回目、3回目の埋葬が行われたとされる。2基の土器埋納遺構はやや不整形な円形で墳頂部の埋葬施設の東側で確認された。須恵器の高壺や壺蓋、壺類が出土しており、2回目と3回目の埋葬儀礼に伴うものと考えられている¹⁰⁾。一方、5号古墳の埋納遺構からは土器は出土しておらず、次項で触れる出土遺物からも小洞西1号古墳の土器埋納遺構のように埋葬儀礼に関連する遺物を納めたものとは考えにくい。5号古墳は、古墳の規模や埋納された遺物の量では遊塚古墳とは比べるべくもないが、県内では

表32 美濃地方における木棺直葬を埋葬施設とする古墳一覧

No	古墳名	所在地	墳形	時期
1	龍門寺1号	岐阜市	c	5世紀初
2	龍門寺12号	岐阜市	a	5世紀前
3	龍門寺13号	岐阜市	a	5世紀前
4	龍門寺14号	岐阜市	a	5世紀前か
5	龍門寺15号	岐阜市	a	5世紀前
6	砂行1号	関市	c	5世紀前
7	遠見塚	池田町	a	5世紀前
8	藤原東山9号	各務原市	a	5世紀後
9	森山5号	恵那市	a	5世紀後
10	宮ノ模1号	中津川市	a	5世紀後
11	願成寺西埴之越36号	池田町	a	5世紀後
12	熊田山北1号	各務原市	a	5世紀後～末
13	南青柳	関市	c	5世紀後～末
14	宮ノ模6号	中津川市	a	5世紀後～6世紀中
15	洞北山5号	岐阜市	b	5世紀末～6世紀前か
16	西ヶ洞3号	郡上市	aか	5世紀末～6世紀初
17	西ヶ洞4号	郡上市	a	6世紀前
18	西ヶ洞6号	郡上市	a	6世紀前
19	西ヶ洞7号	郡上市	不明	6世紀前
20	東天神6号	海津市	a	6世紀後
21	東天神7号	海津市	a	6世紀前
22	東天神8号	海津市	不明	6世紀後
23	七反田番場山11号	岐阜市	不明	5世紀末～6世紀前 6世紀後～7世紀初
24	小洞西1号	関市	a	6世紀後～7世紀初

墳形：a円墳、b方墳、c造り出し付円墳は前方後円墳

このような埋納施設を有する古墳が特異な事例であることから、5号古墳の被葬者が当該地域における首長層であった可能性が考えられる。

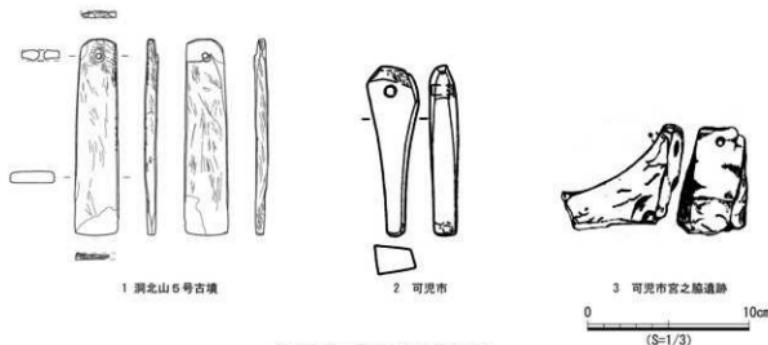
2 埋納遺構出土遺物と5号古墳の被葬者像

5号古墳の出土遺物のうち最も興味深いのは、提砥（第177図1）である。岐阜県内の提砥の出土事例は、1880（明治13）年に可児市の古墳から出土し、東京国立博物館で所蔵する1点（第177図2）があるが古墳名は不明である¹¹⁾。また、同市宮之脇遺跡からも有孔砥石1点（第177図3）が出土しているが、弥生時代以降のものと推定されている以外、詳細不明である¹²⁾。古墳に砥石を副葬する例は、古墳時代前期からあり、近隣では岐阜市の鎌磨1号古墳や龍門寺1号古墳から、それぞれ砥石1点が出土している¹³⁾。鎌磨1号古墳の砥石は撥形、龍門寺1号古墳の砥石は直方体で、どちらも孔は穿たれていない。両古墳の時期は4世紀後半から5世紀初頭とされることから、いずれも5号古墳に先行する例といえる。第3章第3節で述べたように、提砥は朝鮮半島の古墳から出土する「佩砥」に起源をもち、威信材の一つとされた。入江（1998）によれば、日本の古墳から出土する提砥は、①朝鮮半島から将来した提砥（佩砥）、②列島製であるが佩砥の機能をもつ提砥、③実用砥石としての提砥の3つに分類できるが、その多くが②又は③のもので、飾金具や吊り金具がなく、砥石上部を穿孔しただけの小形品が多いとしている¹⁴⁾。また、使用痕跡を残している実用砥石は、本来の威信材としての意味を失い被葬者個人に帰属する砥石と考えられ、その所有者が武人的性格を有している可能性についても指摘している¹⁵⁾。5号古墳出土の提砥は長さ12.1cm、幅2.7cm、厚さ0.8cmと小形で扁平な形状である。上部に穿孔はあるが、飾り金具や吊り金具の痕跡はなく、両面は研磨によると思われ

表33 遊塚古墳埋納施設出土遺物一覧

石製品	車輪石(1)
	刀子(137)
	斧(8)
	鎌(2)
	鑿(1)
武器	銅鏡(33)
	鉄鏡(67)
	鉄劍(18)
	鉄刀(3)
	鉄鉤(1)
農工具	鉄鋤(4)
	鉄鍬(4)
	鐵斧(2)
その他	鉄柄付手斧(1)
	陶質土器(1)

大垣市(2011)を元に作成



第177図 県内出土の有孔砥石

(2・3は川田(2008)及び可児町教育委員会(1976)より転載)

る減りが顕著であり、入江の分類に従えば③の提砥にある。

では、被葬者は武人的性格を有しているといえるのであろうか。これについては、埋納遺構から出土した他の遺物に着目し検討したい。5号古墳からは提砥のほかに、鉄剣1、鉄鎌4（総破片数5）、刀子2が出土し、刀子のうち1点は鹿角製の柄である。門田誠一（2001）は、提砥が甲冑や鉄鎌と共に伴する事例が多いことに言及し¹⁶⁾、角南聰一郎・田部剛士（2002）も、古墳出土の砥石（提砥・置砥）が武器・甲冑及び鉄製工具と共に伴する事例の多いことを指摘している¹⁷⁾。細川晋太郎（2015）は、古墳における置砥と提砥の違いに着目し、出土状況や共伴する副葬品との関連性について、日本と朝鮮半島の事例を集め検討を行っている。これによれば、日本では「提砥は武器類に近接して出土する傾向があり、置砥は棺内・棺外の区別なく農工具類とまとめて配置される傾向が認められる」とから「提砥は武器（武装）に関連し、置砥は工具類に関連する」ことを指摘している¹⁸⁾。また、群馬県渋川市の金井東裏遺跡で見つかった古墳時代の甲冑装人物が、鹿角製の柄を持つ刀子と提砥を身につけていた事例¹⁹⁾は、提砥を副葬する被葬者の性格を裏付けるといえよう。5号古墳の遺物点数は少ないが、鉄剣、鉄鎌が共伴していること、提砥と鹿角製の柄を持つ刀子がセットで出土していることから、被葬者が武人的性格を有していた可能性は高い。

以上のように、5号古墳は、同時期では周辺でも例を見ない方墳に木棺直葬という組合せの形態をとり、埋納遺構を設けていた。また、県内でも出土事例の稀な提砥が武器類とともに出土していることから、その被葬者は武人的性格を有した特殊な人物像が考えられる。

注

1) 成瀬正勝 2002「美濃の中晩古墳」『古墳時代中期の大型墳と小型墳—初期群集墳の出現とその背景—』（発表要旨編）、第10回東海考古学フォーラム浜北大会・静岡県考古学会シンポジウム実行委員会編、東海考古学フォーラム・静岡県考古学会

2) 前掲1) 58頁

3) 可児市次郎兵衛塚1号古墳（1辺29.5m、二段築成）、垂井町南大塚古墳（1辺25m、二段築成）、閔市小瀬方墳（1辺

- 22.5m、三段築成)、同池尻大塚古墳(1辺 22.4m、三段築成)などが知られる。
- 可児市教育委員会 1994『川合遺跡群』本文編、垂井町 1996『新修 垂井町史』通史編、関市教育委員会 1994『新修関市史』考古・文化財編、田中弘志 1996『池尻大塚古墳測量調査報告』『美濃の考古学』創刊号、美濃の考古学刊行会
- 4) 成瀬(2002)は、美濃地域の古墳時代中期の特徴について、①前期大型前方後円墳の終焉と円墳化、②円墳を主体とする首長墓群を新たに造営する地域の発生、③新たに大型前方後円墳を築造する2つの古墳群の形成、とまとめている。野古墳群は③に該当する古墳群の一つである。また、砂行1号古墳や南青柳古墳、後平茶臼古墳は②の事例にあてはまり、5号古墳も②に類する古墳の一つと考えたい。
- 5) 5号古墳は、比較対象として挙げた同時期の古墳と比べると、同時期の古墳では主張的ではない小型の方墳であること、方墳でも墳丘規模がやや劣ること、埴輪をもたないことなどから、やや下位に位置付けられると思われる。
- 6) 高山市府町の保別戸1号古墳は方墳で木棺直葬を埋葬施設とするが、出土した土師器高杯が廻間II式後半～廻間III式前半に位置付けられることから、築造年代もこの土器の年代に近い時期と推定されている。(財団法人岐阜県文化財保護センター2002)
- 7) 豊島直博は、古墳時代中期以降に前方後円墳の前方部や陪塚に人体を埋葬せず、多量の鉄器を埋納する施設を鉄器埋納施設とし、埋納された武器の型式学的分析を通して、鉄器埋納施設の性格について論じている。本稿では、遺物のみを総める広義の意味と、豊島の指摘する多量の鉄器を埋納する狭義の意味で「埋納施設」を使い、5号古墳の埋納施設については、人体を埋葬せず武器を埋納するという点では共通するものの、その埋納される鉄器の量に大きな差があることから「埋納遺構」とした。また、小洞西1号古墳については報告書の記載に従った。
- 豊島直博 2000『鉄器埋納施設の性格』『考古学研究』第40巻第4号、考古学研究会
- 8) 岐阜市長良に所在する龍門寺1号古墳や同15号古墳は、棺外に「遺物収蔵庫」や「副葬施設」を持つと報告されている(岐阜市教育委員会 1962、岐阜市教育委員会 1969)が、これらは棺外副葬品と考えられることから埋納施設とはしなかった。
- 樋崎彰一 1962「第3章 古墳の形態と構造」『岐阜市長良龍門寺古墳群』、岐阜市教育委員会 28頁
- 樋崎彰一 1969「龍門寺古墳群調査報告」『岐阜市埋蔵文化財調査報告書』第二輯、岐阜市教育委員会 22頁
- 9) 遊塚古墳の出土遺物については、大垣市(2011)を参考にした。
- 大垣市 2011「附編2 遊塚古墳群出土遺物報告」『大垣市史』(考古編)
- 中井正幸 1998「遊塚古墳再考」『樋崎彰一先生古稀記念論文集』樋崎彰一先生古稀記念論文集刊行会編、有限会社真陽社 565頁
- 10) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2008『小洞跡 小洞西1号古墳』23頁
- 11) 川田壽文 2008「砥礪考2」『白門考古論叢II』(中央大学考古学研究会創設40周年記念論文集)、中央考古会・中央大学考古学研究会 119・126頁
- 12) 可児町教育委員会 1976『宮之脇遺跡発掘調査報告書』81・86頁
- 13) 樋崎彰一 1979「第2部考古 第3節古墳時代」『岐阜市史』(史料編考古・文化財)、岐阜市 197-199頁
- 14) 入江文敏 1998「佩砾考」『網干善教先生古稀記念考古学論集』上巻、網干善教先生古稀記念会 875頁
- 15) 入江は、『養老律令』の「軍防令」の備具条に、兵士の装備品(負担品)として「鐵石一枚」の記載があることについて、記載内容が大化前代以来の伝統を反映している可能性があることに触れ、「鐵石を副葬する古墳の多くが劍・刀や鉄鎌などの武器をほぼ普遍的に保有していることが認められれば、より一層被葬者を武人(兵士)とする蓋然性が高いと考える」と述べている。
- 前掲 14) 884-886頁

- 16) 門田誠一 2001「古墳出土の提紙－近年の韓国出土資料との対照による若干の視点－」『園部岸ヶ前古墳群発掘調査報告書』佛教大学校地（文化財等）調査委員会編、佛教大学 134 頁
- 17) 角南聰一郎・田部剛士 2002「古墳出土砥石の基礎的研究－近畿地方の事例－』『奈良大学大学院研究年報』7号、奈良大学大学院 312 頁
- 18) 細川晋太郎 2015「五條猫塚古墳出土砥石の副葬背景」『五條猫塚古墳の研究』（総括編）、奈良国立博物館 375・384 頁
- 19) 杉山秀宏 2015「金井東裏遺跡の調査」『国際シンポジウム「よみがえれ古墳人』記録集・資料集』、よみがえれ古墳人東国文化発信委員会

引用・参考文献

- 網干善教編 1981『東天神古墳群6・7・8号墳』、岐阜県南濃町教育委員会
- 青木敬 2003『古墳築造の研究』、六一書房
- 井川祥子 2006『美濃中世後期土師器皿の分類と編年』『守護所と戦国城下町』内堀信雄他編、高志書院
- 池田町教育委員会 1991『遠見塚古墳発掘調査報告書』
- 池田町教育委員会 2001『岐阜県史跡 順成寺西墳之越古墳群 36号墳発掘調査・74~88号墳周辺確認調査報告書』
- 糸貫町教育委員会・本郷町教育委員会(船来山古墳群発掘調査団) 1999『船来山古墳群』(本文編・別冊編・別添図)
- 入江文敏 1998『佩砥考』『網干善教先生古稀記念考古学論集』上巻、網干善教先生古稀記念会
- 内堀信雄・井川祥子 1996『美濃における古代煮炊具の様相』『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕 そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 宇野隆夫 1992『食器計量の意義と方法』『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集、国立歴史民俗博物館
- 恵那市教育委員会 1984『森山第5号古墳調査報告書』
- 大垣市 2011『大垣市史』(考古編)
- 大野町教育委員会 1984『史跡野古墳群調査概要(II) - 第七号古墳の調査 -』
- 大野町教育委員会 1995『史跡 野古墳群(V) - 第8号墳・第9号墳範囲確認調査概報 -』
- 大野町教育委員会 2007『大野町北部山麓古墳群発掘調査報告書』(堂ヶ洞古墳群、三ヶ原古墳群、カイト古墳群、物干山遺跡、カイト遺跡、柚木洞・布賀利神社遺跡)
- 岡本直久 2001『中世後期の火葬墓 ~品野西中世墓の位置付け~』『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要』第9輯、財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 小川栄一 1931『郷土研究資料』第一号(小川栄一氏研究)、岐阜縣師範學校郷土研究室
- 小鹿野亮 2003『古代道における路体施工の複合性』『九州考古学』第78号、九州考古学会
- 小野木学「岐阜県」2005『中世墓資料集成』(中部・東海編) 中世墓資料集成研究会編、中世墓資料集成研究会
- 各務原市教育委員会 1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』
- 各務原市教育委員会 1990『山の前1・2号古墳発掘調査報告書』
- 各務原市埋蔵文化財調査センター 1999『蘇原東山遺跡群発掘調査報告書』、各務原市教育委員会
- 各務原市埋蔵文化財調査センター 2000『ふな塚古墳発掘調査報告書一大牧4号墳-』、各務原市教育委員会
- 各務原市埋蔵文化財調査センター 2008『熊田山北古墳群発掘調査報告書』、各務原市教育委員会
- 可児市教育委員会 1994『川合遺跡群』(「川合北部土地区画整理事業」に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書)
- 可児町教育委員会 1976『宮之脇遺跡発掘調査報告書』

- 川田壽文 2008「砥礪考2」『白門考古論叢II』（中央大学考古学研究会創設40周年記念論文集）、
中央考古会・中央大学考古学研究会
- 岐阜県 1998『特集と年表でつづるひだみの災害 岐阜県災害史』
- 岐阜県 2003『岐阜県史』（考古資料）
- 岐阜県企画部土地対策課 1983『岐阜県土地分類基本調査』（大垣）
- 岐阜県文化財保護センター 2013『荒尾南遺跡A地区II』
- 岐阜県文化財保護センター 2017『年報17』
- 岐阜県文化財保護センター 2017『岐阜県新発見考古速報2016』（平成28年度岐阜県発掘調査報告会
発表資料）
- 岐阜市 1979『岐阜市史』（史料編 考古・文化財）
- 岐阜市 1980『岐阜市史』（通史編 原始・古代・中世）
- 岐阜市 1981『岐阜市史』（通史編 近世）
- 岐阜市教育委員会 1985「上城田寺長屋1号墳」『岐阜市文化財報告』85 岐阜市埋蔵文化財発掘調査
報告書』
- 岐阜市教育委員会 1975『宇田遺跡発掘調査報告書』
- 岐阜市教育委員会 1986『椿洞古墳群発掘調査報告書』
- 岐阜市教育委員会 1989『椿洞遺跡発掘調査報告書』
- 岐阜市教育委員会 1990『椿洞遺跡 2』
- 岐阜市教育委員会 1994『上城田寺古墳群』
- 岐阜市教育委員会 1995『御望遺跡』
- 岐阜市教育委員会 1996『岐阜市遺跡詳細分布調査報告書』
- 岐阜市教育委員会 1997『平成8年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』
- 岐阜市教育委員会 1998『平成9年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』
- 岐阜市教育委員会・財団法人岐阜市教育文化振興事業団 2003『平成13・14年度岐阜市市内遺跡発掘調
査報告書』
- 岐阜市教育委員会・公益財団法人岐阜市教育文化振興事業団 2011『平成21・22年度岐阜市市内遺跡発
掘調査報告書』
- 岐阜市教育委員会・公益財団法人岐阜市教育文化振興事業団 2012『平成22・23年度岐阜市市内遺跡発
掘調査報告書』
- 岐阜市教育委員会・公益財団法人岐阜市教育文化振興事業団 2013『平成23年度岐阜市市内遺跡発掘
調査報告書』
- 岐阜市教育委員会・公益財団法人岐阜市教育文化振興事業団 2014『平成24年度岐阜市市内遺跡発掘
調査報告書』
- 岐阜市歴史博物館 2013『企画展 古地図にみる江戸時代の美濃』
- 岐阜西開発株式会社・財団法人岐阜市教育文化振興事業団 2007『船来山古墳群』
- 黒野史誌編集委員会 1987『岐阜市 黒野史誌』、黒野校下自治会連合会
- 公益財団法人岐阜市教育文化振興事業団 2012『鷺山遺跡群第4分冊鷺山市場遺跡』（岐阜市都市計画

- 事業鷺山・下土居土地区画整理事業における区画道路建設に伴う緊急発掘調査)
- 御望山調査検討会 2006「II 御望山周辺の自然史」『御望山調査検討会報告書』、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所
- 齊藤孝正 1995「I 東海西部（愛知・岐阜）」『須恵器集成図録』第3巻（東日本編 I）、雄山閣出版株式会社
- 財団法人岐阜市教育文化振興事業団 1999『城之内遺跡』（北町堀田線・宮口町高見線街路事業に伴う緊急発掘調査）、岐阜市教育委員会
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 1995『西ヶ洞遺跡・西ヶ洞古墳群』（東海北陸自動車道建設に伴う緊急発掘調査報告書）
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 2000『砂行遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 2000『船山北古墳群・船山北古窓跡群・船山北遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 2002『南青柳遺跡 南青柳古墳 大平前遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 2002『保別戸古墳群』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 2002『後平茶臼古墳・後平遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 2003『深橋前遺跡』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2005『七反田番場山 7・10・11号古墳』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2008『小洞遺跡・小洞西1号古墳』
- 財団法人岐阜市教育文化振興事業団 2011『鷺山遺跡群第1分冊下土居若宮遺跡・下土居北門遺跡』（岐阜市都市計画事業鷺山・下土居土地区画整理事業における区画道路建設に伴う緊急発掘調査）
- 鹿野豊 2006『古墳出土の砥石』『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館共同研究成果報告書 2004年度』、財団法人大阪府文化財センター
- 震災予防調査会 1973「附録 大日本地震史料地震目録」『大日本地震史料』（複刻）、初版 1904、株式会社思文閣
- 杉山秀宏 2015「金井東裏遺跡の調査」『国際シンポジウム「よみがえれ古墳人」記録集・資料集』、よみがえれ古墳人東国文化発信委員会
- 角南聰一郎・田部剛士 2002「古墳出土砥石の基礎的研究－近畿地方の事例－」『奈良大学大学院研究年報』7号、奈良大学大学院
- 閑市教育委員会 1989『塙原遺跡 塙原古墳群』
- 閑市教育委員会 1994『新修閑市史』（考古・文化財編）
- 第10回東海考古学フォーラム浜北大会・静岡県考古学会シンポジウム実行委員会編 2002『古墳時代中期の大型墳と小型墳－初期群集墳の出現とその背景－』（発表要旨編・資料編）、東海考古学フォーラム・静岡県考古学会
- 高田康成 2001「鉄鏃から見た美濃の古墳の地域性」『美濃・飛騨の古墳とその社会』（東海の古代①）、株式会社同成社
- 田中弘志 1996「池尻大塚古墳測量調査報告」『美濃の考古学』創刊号、美濃の考古学刊行会
- 田辺昭三 1982『須恵器大成』、角川書店

- 垂井町 1996『新修 垂井町史』(通史編)
- 丹治篤嘉 2013「南相馬市割田遺跡群における竪穴住居跡の特徴」『福島県文化財センター白川館研究紀要 2012』、財團法人福島県文化振興財團・福島文化財センター白川館
- 通商産業省工業技術院地質調査所 1992『1:200,000 地質図 岐阜』
- 東海考古学フォーラム三河実行委員会・三河古墳研究会編 2001『第8回東海考古学フォーラム三河大会 東海の後期古墳を考える』
- 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編 2013『発掘調査のてびき』各種遺跡調査編、文化庁文化財部記念物課監修、株式会社同成社
- 豊島直博 2000「鉄器埋納施設の性格」『考古学研究』第40卷第4号、考古学研究会
- 中井正幸 1992「岐阜県の横穴式石室」『花岡山古墳群』、大垣市教育委員会文化部
- 中井正幸 1998「遊塚古墳再考」『楢崎彰一先生古稀記念論文集』楢崎彰一先生古稀記念論文集刊行会編、有限会社真陽社
- 中井正幸 2001「前期古墳から中期古墳へ」『美濃・飛騨の古墳とその社会』(東海の古代①)、株式会社同成社
- 中津川市教育委員会 1978『宮ノ根古墳群発掘調査報告書』
- 楢崎彰一 1962『岐阜市長良龍門寺古墳群』、岐阜市教育委員会
- 楢崎彰一 1969「龍門寺古墳群調査報告」『岐阜市埋蔵文化財調査報告書』第二輯、岐阜市教育委員会
- 成瀬正勝 1985「横穴式石室の型式と変遷について」『岐阜史学』第79号、岐阜史学会
- 成瀬正勝 1999「美濃における横穴式石室の構築方法」『岐阜史学』第96号、岐阜史学会
- 服部伊久男 1988「終末期群集墳の諸相」『権原考古学研究所論集』第9、吉川弘文館
- 土生田純之 2003「横穴式古墳構築過程の復元」『古墳構築の復元的研究』、株式会社雄山閣
- 土生田純之 2016「日本における古墳構築技術の土木考古学的研究」『専修考古学』第15号、専修大学考古学会
- 深谷淳 2011「横穴式石室の奥壁隅に土師器を据える行為」『古代学研究』189号、古代學研究會
- 福島県中島村教育委員会 2014『四穂田古墳出土遺物調査報告書』
- 細川晋太郎 2015「五條猫塚古墳出土砥石の副葬背景」『五條猫塚古墳の研究』(総括編)、奈良国立博物館
- 水野敏典 2013「1 金属製品の型式学的研究 ⑤鉄鏹」『副葬品の型式と編年』(古墳時代の考古学4)、株式会社同成社
- 本巣市教育委員会 2012『本巣市詳細遺跡分布調査報告書』
- 本巣市教育委員会 2016『本巣市詳細遺跡分布調査報告書』(改訂版)
- 本巣市教育委員会 2017『本巣市船来山古墳群総括報告書』(本文編)
- 門田誠一 2001「古墳出土の提砥—近年の韓国出土資料との対照による若干の視点—」『園部岸ヶ前古墳群発掘調査報告書』佛教大学地(文化財等)調査委員会編、佛教大学
- 吉田史郎・鷺田浩二 1999「岐阜地域の地質」『地域地質研究報告』(5万分の1地質図幅)、通商産業省工業技術院地質調査所
- 渡邊博人 1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相」『美濃の考古学』創刊号、美濃の考古学刊行会

図版1 古墳群遠景



平成27年度 発掘区（南から）



平成28年度 発掘区（南から）

図版2 3号古墳



3号古墳及び2号古墳全景（南から）



周溝（西）土層断面（南から）



周溝（東）完掘状況（南東から）



周溝（北西）土層断面及びSM1造成土（北西から）

図版3 4号古墳（1）



填丘検出状況（南西から）



4号古墳全景（西から）



4号古墳全景（南から）



4号古墳全景（東から）



4号古墳全景（北から）

図版4 4号古墳(2)



閉塞石検出状況（南から）



玄室検出状況（南から）



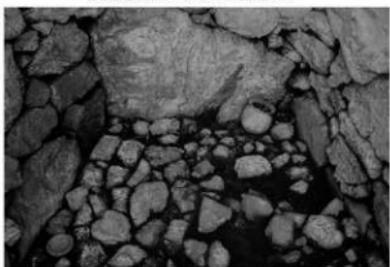
玄門（北から）



羨道遺物出土状況（南東から）



小石器遺物出土状況（南から）



奥壁手前遺物出土状況（南から）

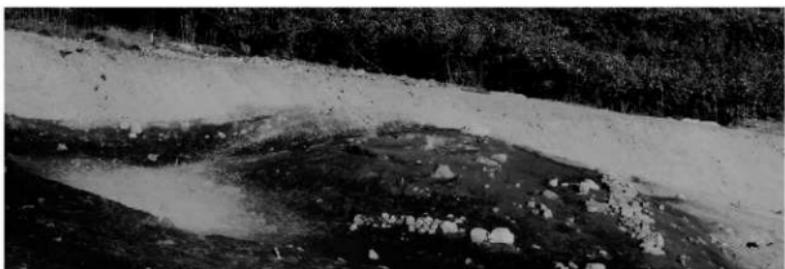


玄門付近遺物出土状況（北から）

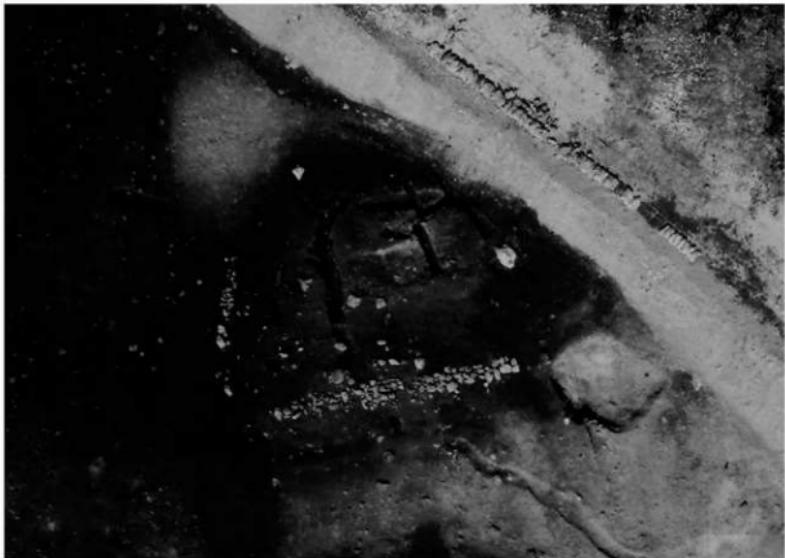


石室基底石検出状況（南から）

図版5 5号古墳(1)



5号古墳全景（西から）



5号古墳全景（南から）



5号古墳全景（東から）



5号古墳全景（北から）

図版6 5号古墳(2)



遺物出土状況（南から）



遺物出土状況（南から）



墳丘盛土土層断面（西から）



墳丘盛土土層断面（南東から）



墳丘盛土及び周溝土層断面（発掘区北壁）（南西から）

図版7 6号古墳（1）



6号古墳全景（南から）



6号古墳全景（東から）



6号古墳全景（北から）



6号古墳全景（西から）



奥壁手前遺物出土状況（南から）

図版8 6号古墳(2)・7号古墳(1)



6号古墳石室左側壁(南東から)



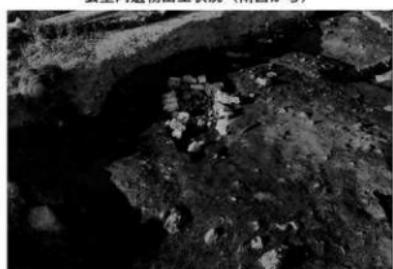
6号古墳石室右側壁(南西から)



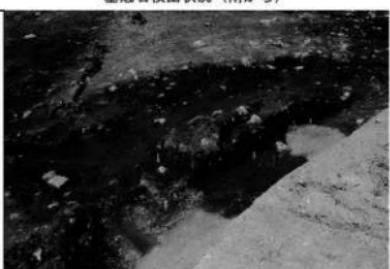
玄室内遺物出土状況(南西から)



基底石検出状況(南から)



7号古墳(平成27年度)(南から)



7号古墳(平成28年度)(南から)



7号古墳(平成28年度)(西から)



7号古墳(平成28年度)(北から)

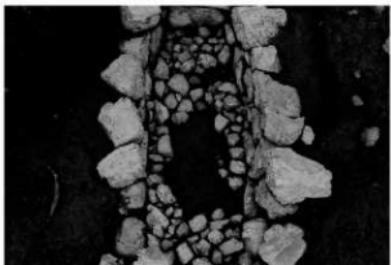
図版9 7号古墳(2)・8号古墳(1)



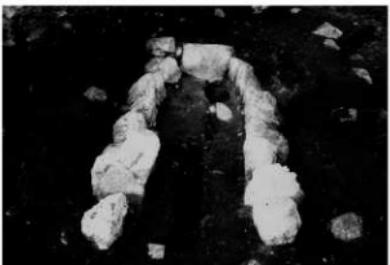
7号古墳石室左側壁(東から)



7号古墳石室右側壁(西から)



石室内遺物出土状況(南から)



基底石検出状況(南から)



8号古墳全景(南から)



8号古墳全景(東から)



8号古墳全景(北から)



8号古墳全景(西から)

図版10 8号古墳(2)・9号古墳(1)



8号古墳石室左側壁(南東から)



8号古墳石室右側壁(南西から)



奥壁手前遺物出土状況(南から)



基底石検出状況(南から)



9号古墳全景(南から)



9号古墳全景(東から)



9号古墳全景(北から)



9号古墳全景(西から)

図版11 9号古墳(2)・10号古墳



9号古墳石室左側壁（南東から）



9号古墳石室右側壁（南西から）



9号古墳石室掘方検出状況（南東から）



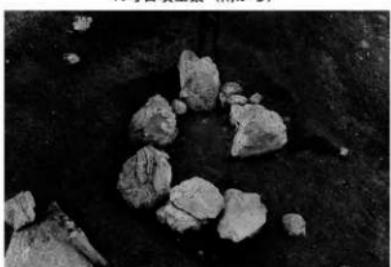
9号古墳基底石検出状況（南から）



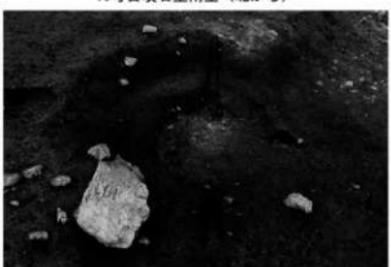
10号古墳全景（南から）



10号古墳石室南壁（北から）

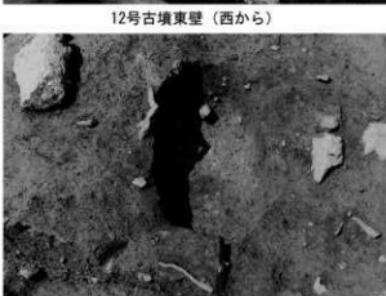
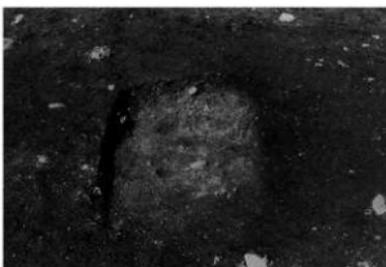


10号古墳基底石検出状況（南から）



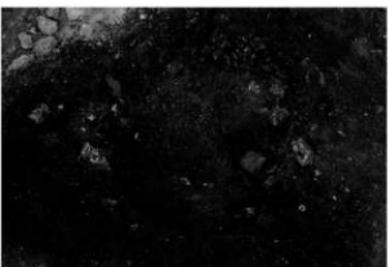
10号古墳石室掘方完掘状況（南から）

図版12 11号古墳・12号古墳





SL 1 完掘状況（西から）



SL 2 完掘状況（南から）



SS 1 検出状況（南から）



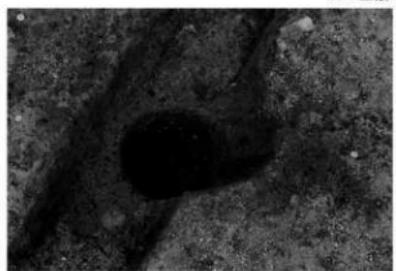
SS 1 と 9号古墳との位置関係（南東から）



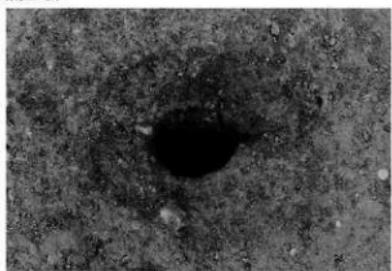
SS 1 遺物出土状況（南から）



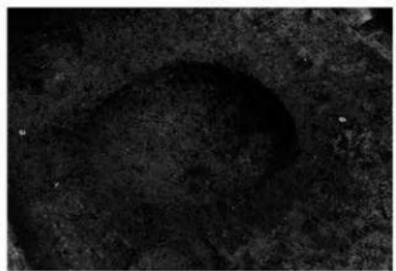
SI 1 全景 (南から)



SI 1-P 1 (南東から)



SI 1-P 2 (南から)



SI 1-P 3 (南から)



SI 1 完掘状況 (南から)



SF 1 完掘状況（旧谷地形東側）（東から）

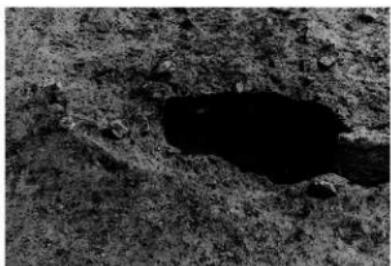


SF 1 完掘状況（旧谷地形西側）及びSM 2 の平坦面（西から）

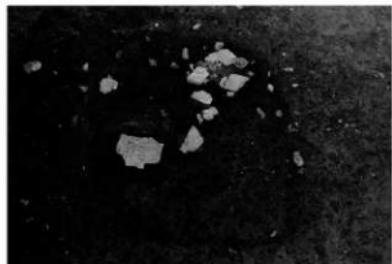
図版16 ST 1・2・4



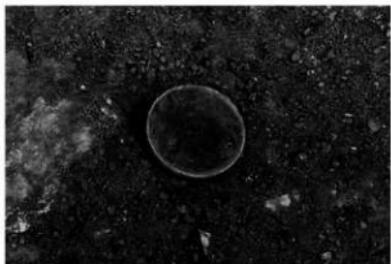
ST 1 骨片出土状況（西から）



ST 1 完掘状況（西から）



ST 2 全景（南から）



ST 2 遺物出土状況（南から）



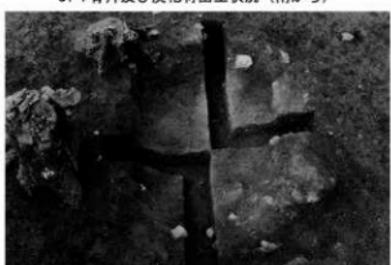
ST 4 土師器皿出土状況（南から）



ST 4 骨片及び炭化材出土状況（南から）



ST 4 全景（南から）



ST 4 完掘状況（南から）



SD 1 完掘状況（南西から）



SD 1 土層断面（南西から）



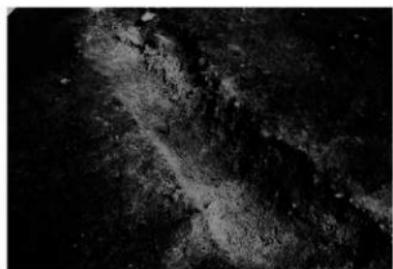
SD 2 検出状況（西から）



SD 2 土層断面（西から）



SD 3 完掘状況（西から）



SD 4 完掘状況（南西から）



SD 4 土層断面（南から）



SD 8 完掘状況（平成27年度）（北から）



SD12完掘状況（北から）



SD 8 土層断面（南から）



SD12土層断面（南から）



SM 1に伴う造成土と旧谷地形の堆積（南から）

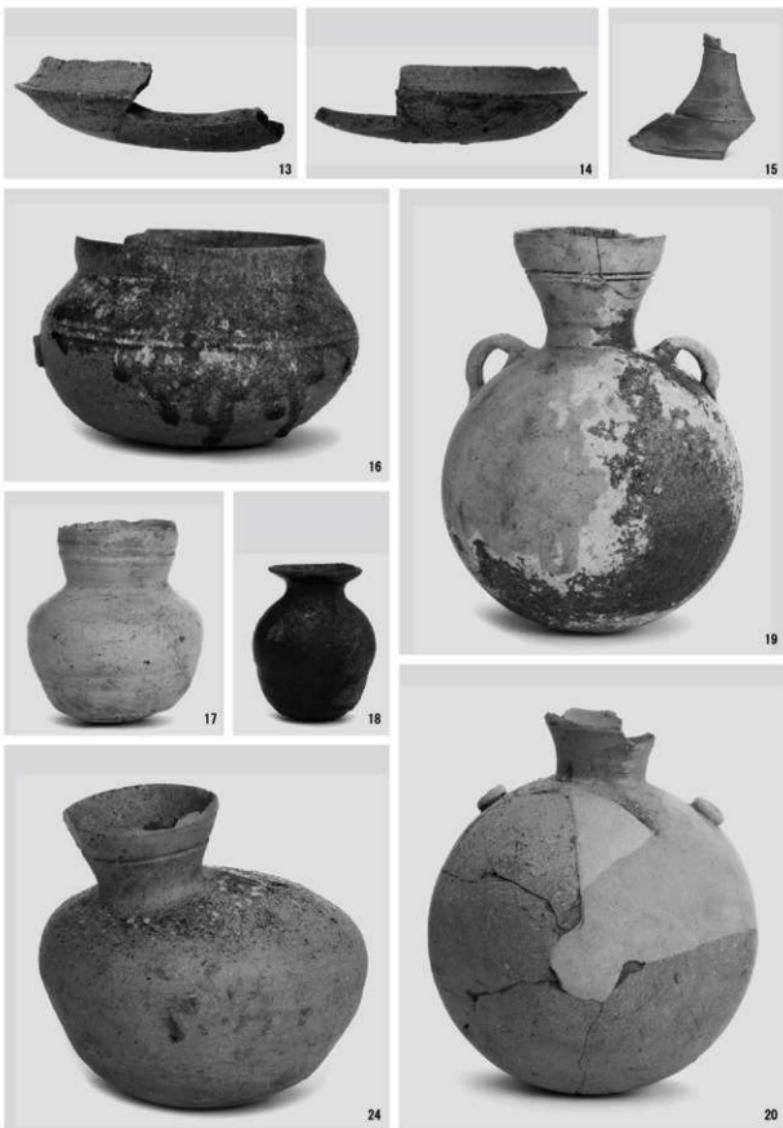


SM 3の平坦面（西から）

图版20 出土遗物（1）



4号古墳石室内出土土器（1）



4号古填石室内出土土器（2）

图版22 出土遗物（3）



21



22



23



28

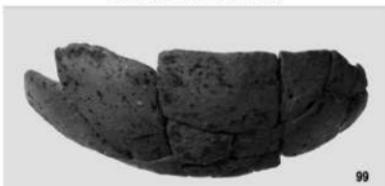


29

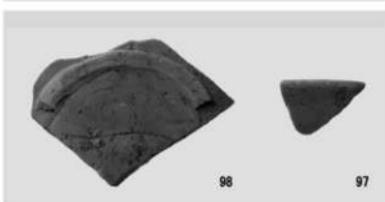
4号古填石室内出土土器（3）



8号古墳石室内出土土器



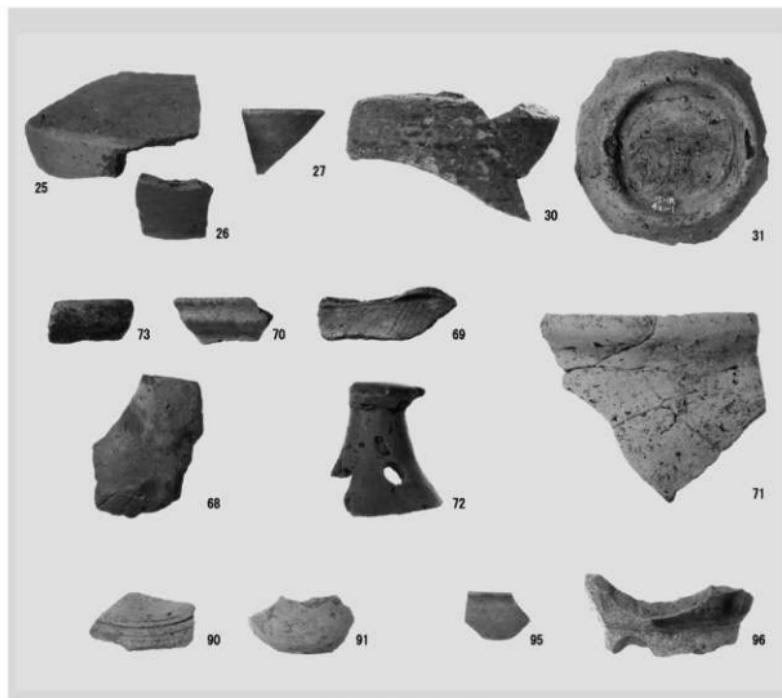
6号古墳石室内出土土器



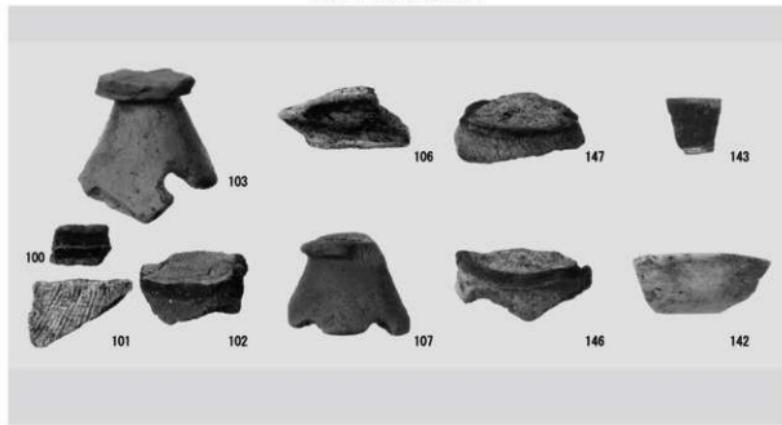
7号古墳石室内出土土器

9号古墳石室内出土土器

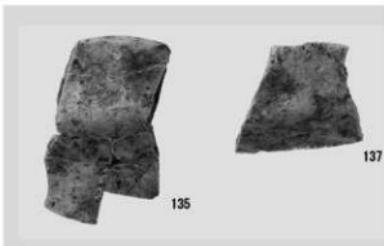
図版24 出土遺物（5）



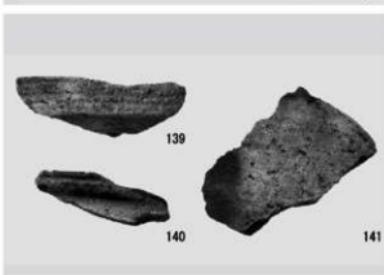
古墳（石室外）出土土器



SI・SF・SK・SM出土土器



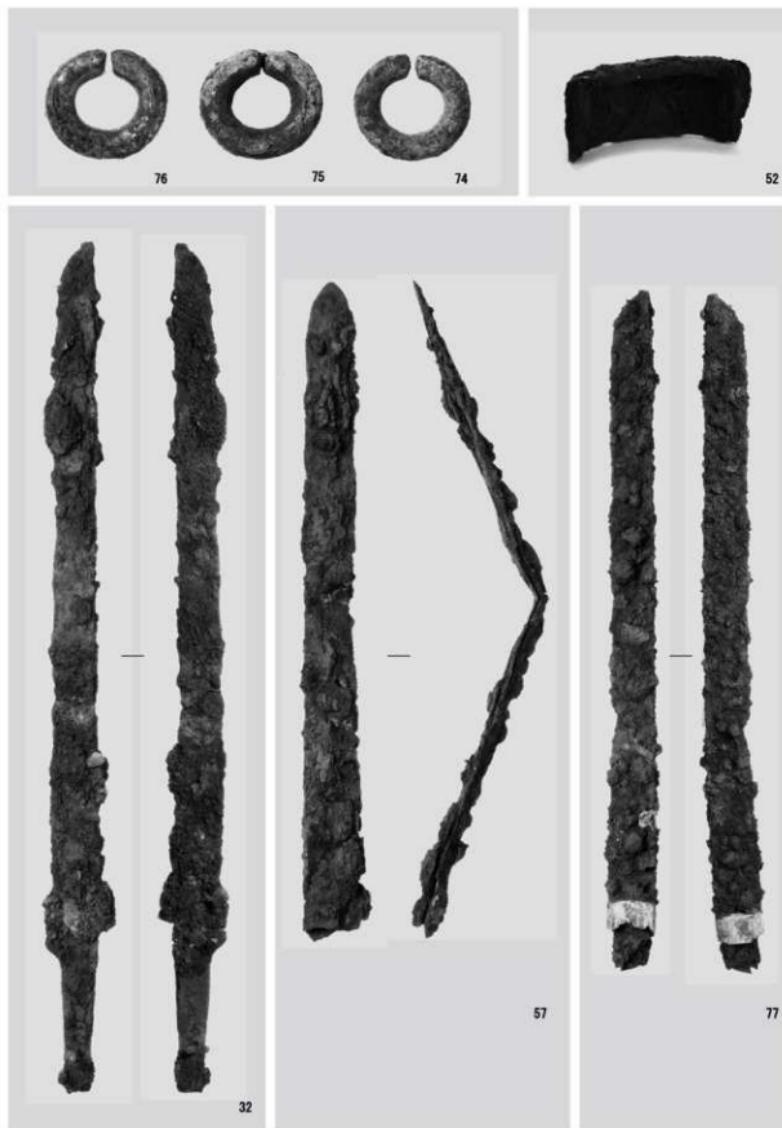
SD 4 出土土器



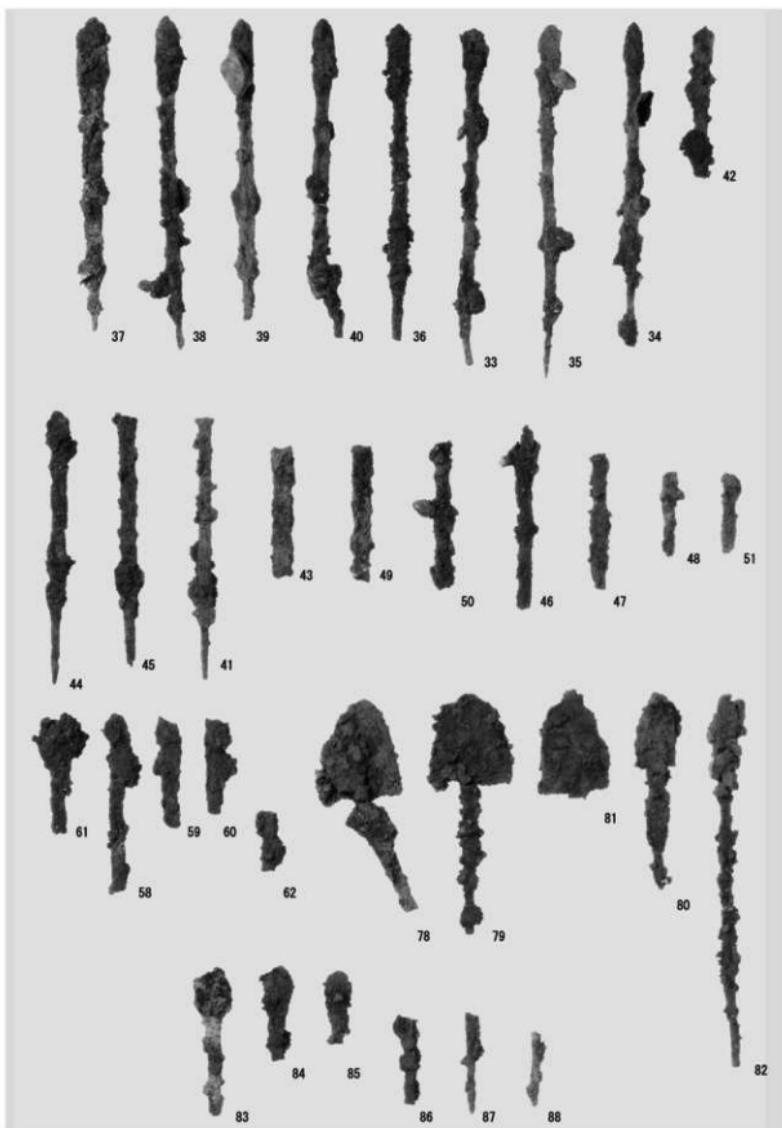
SD 8 出土土器

ST 2 · ST 4 出土土器

図版26 出土遺物（7）

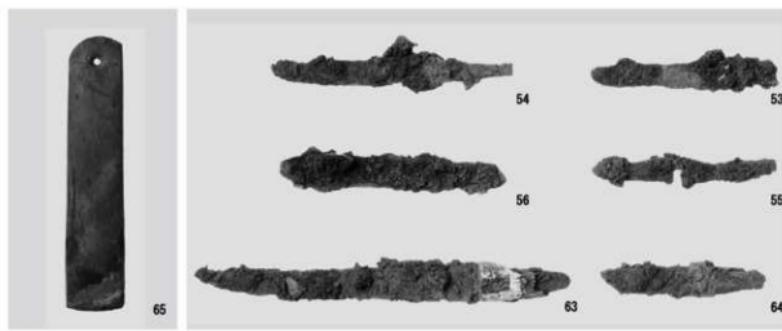


4・5・6号古墳出土 耳環・鉄劍・鉄刀・刀装具

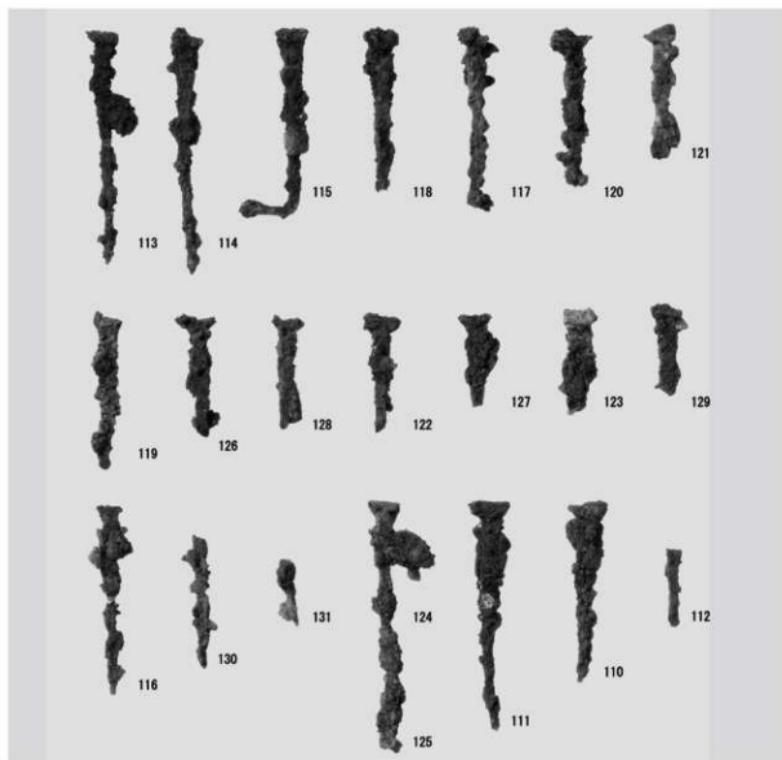


4・5・6号古墳出土 鉄鏃

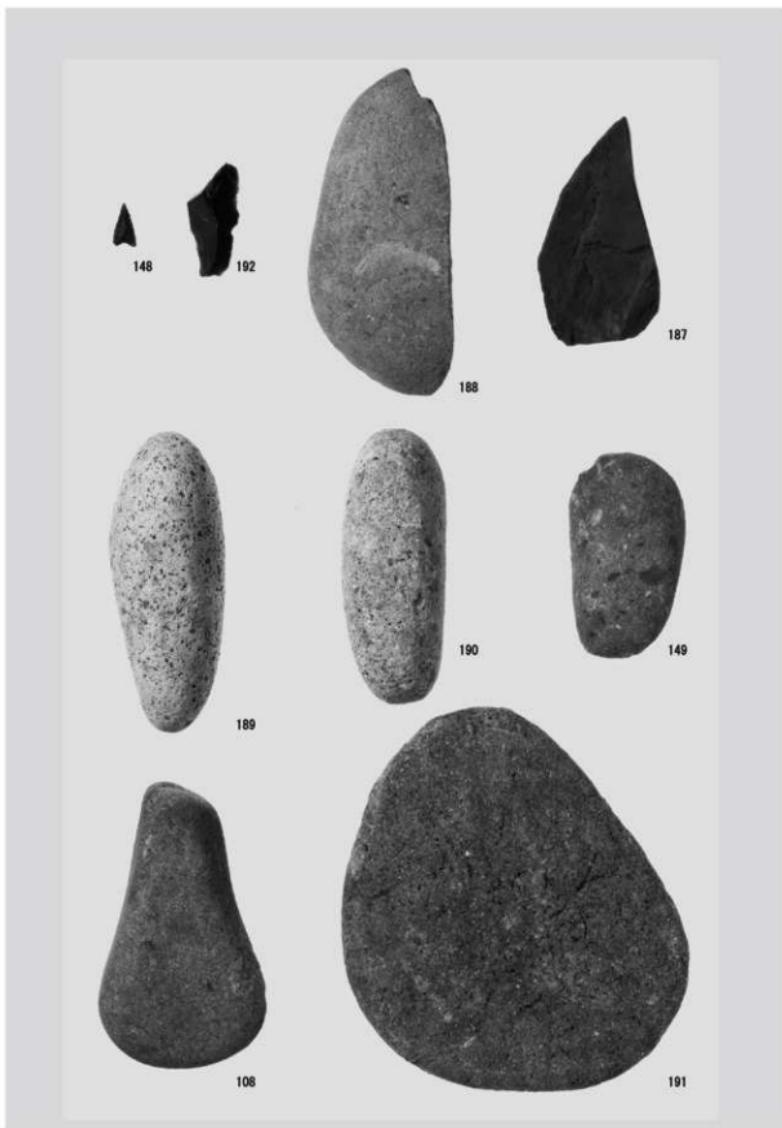
図版28 出土遺物（9）



5号古墳出土 提砥 • 4・5号古墳出土 刀子

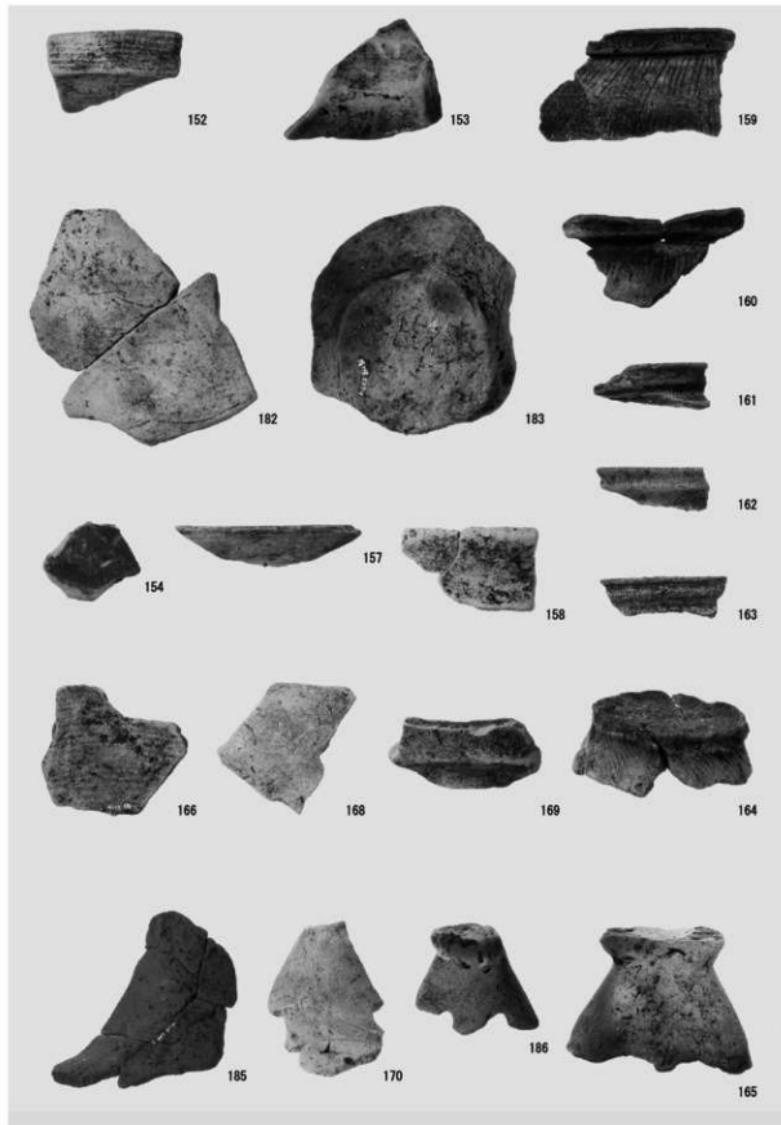


ST 3・4出土 鉄釘

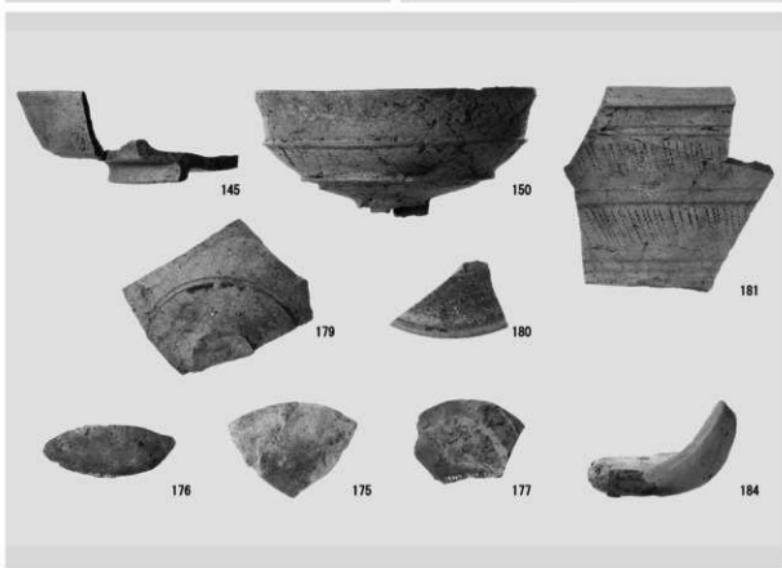
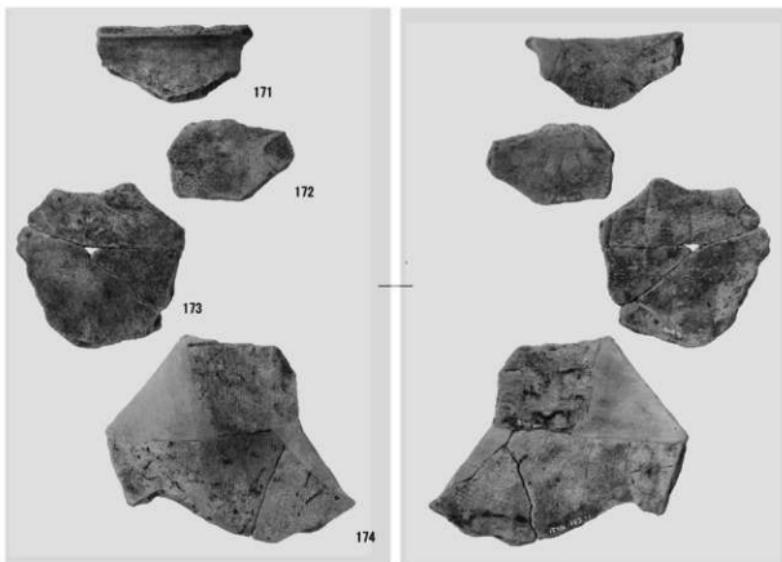


SF 1 · 試掘坑 · 搅乱坑 · 遗物包含層出土石器

図版30 出土遺物 (11)



图版31 出土遗物 (12)



遗物包含层出土遗物 (2)

報 告 書 抄 錄

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第143集

洞 第 2 古 墳 群

2020年2月28日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社もとすいんさつ